

[020]報告

大神, 智春
九州大学留学生センター : 准教授

鹿島, 英一
九州大学留学生センター : 教授

斉藤, 信浩
九州大学留学生センター : 講師

吉川, 裕子
九州大学留学生センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/4777975>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 20, pp.85-162, 2012-03. 九州大学留学生センター
バージョン :
権利関係 :



九州大学留学生のための日本語コース (JLCs)

大 神 智 春*

1. コースの概要

全学補講コース (Japanese Language Courses 以下 JLCs) は総合・漢字・会話・読解・作文・専門の6コースで構成されている。九州大学に在籍している留学生が主なJLCsの受講対象者であり、受講者のニーズは多岐に渡る。

近年、JLCsの受講者数は急増しており、2009年度の秋学期は、当センター開設以来初めて受講登録者数が500名を上回り、述べ受講者数も800名に迫る781名となった¹⁾。しかし当センターの組織は1996年(平成8年)にJLCsが開始された当時と大きな変化がなく、これ以上の学習者の受け入れが困難な状況にある。

そこで、今年度の春学期から、留学生センター所属でない者については、以下の優先順位を設けて受講者を受け入れることにした。

- 1) 学生(大学院生、学部生、研究生、交換留学生、聴講生)の身分であること
- 2) 本校来学1年以内であること

1-1 コース編成・1週間あたりの授業開講数

昨年度までのコース編成および1週間あたりの開講授業数に問題がなかったことから、今年度も昨年度と同様のコースを開講した(表1)。

表1 JLCsのコース編成

	日 本 語 コ ー ス					
	総 合	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
入 門	J-1(3)					
初 級 1	J-2(3)	K-2(2)	S-2(2)			
初 級 2	J-3(3)	K-3(2)	S-3(2)			
中級入門	J-4(3)	K-4(2)	S-4(2)			
中 級 1	J-5(2)	K-5(2)	S-5(2)			
中 級 2	J-6(2)	K-6(2)	S-6(2)	R-6(2)		
上級入門	J-7(2)	K-7(2)	S-7(2)	R-7(2)	W-7(2)	
上 級	J-8(1)	K-8(2)	S-8(2)		W-8(2)	T-8(1)

※ () 内は1週間の授業回数

*九州大学留学生センター准教授

1-2 教材

2009年（平成21年度）から初級 J コース（J1～J2）で使用する教科書を段階的に変更してきたが、今年度は全初級 J コース（J1～J3）において『初級日本語げんき I、II』を使用することになった。また、J5で使用する教科書を『中級を学ぼう』に変更した（表2）。

表2 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
J-1	『初級日本語げんき I』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
J-2	『初級日本語げんき I、II』	K-3	
J-3	『初級日本語げんき II』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1,2』
J-4	『J. Bridge』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
J-5	『中級を学ぼう』	K-6	
J-6	『日本語中級 J301』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
J-7	『文化中級 II』	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
J-8	自主作成教材を使用	読解	使用教材
会話	使用教材	R-6	『大学生と留学生のための論文ワークブック 読解編』
S-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	R-7	『大学生と留学生のための論文ワークブック 論文編』
S-3		作文	使用教材
S-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-7	『大学生と留学生のための論文ワークブック 作文編』
S-5	『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編2』	W-8	『小論文への12のステップ』
S-6	『日本語上級話者への道』		
S-7	自主作成教材を使用		
S-8			

1-3 開講スケジュール

春学期および秋学期のコース開始時期に来学できなかった留学生を受け入れるために、2008年度（平成20年度）から、春学期および秋学期内をさらに2分割した4期制を採用している（表3）。学習者は第1期および第3期の学期開始時期にJLCsの申し込みが間に合わなくても、6週間待って第2期あるいは第4期に申し込むことができる。

表3 JLCsの開講スケジュール

	学期	開 講 時 期
春学期	第1期	平成22年4月8日～5月26日
	第2期	平成22年5月31日～7月9日
秋学期	第3期	平成22年10月18日～12月1日
	第4期	平成22年12月6日～2月7日

1-4 プレースメントテスト

2009年度までは箱崎キャンパスおよび伊都キャンパスの2箇所に会場を設け、紙の形でプレースメントテストを実施していた。しかし、以下の理由で紙テストの形での実施が困難になってきたため、2009年度からプレースメントテストのオンライン化に取り組み始めた（小森 2010）。

- 1) 各キャンパスに在籍している学習者が箱崎キャンパスや伊都キャンパスまで受験に来なければならず大きな負担となっている。
- 2) 限られた時間の中で500名を超える学習者の解答用紙を教員が手作業で処理することに限界がある。

オンラインテストシステムは、問題なく作動するかの実験も含め約1年をかけて開発し、2010年度の秋学期からシステムを本格的に始動させた。

オンラインで受験することができるテストは総合テスト（文法・聴解・読解）と漢字テストである。

プレースメントテストのオンライン化により、学習者は研究室や自宅でテストを受験することができるようになった。また、自動採点機能を設けたため、教員の作業負担も軽減させることができた。

尚、学習者のパソコンの設定によってはテスト受験中にエラーが生じテストを続けることができなくなる可能性があるため、オンラインテストに問題が生じた者のために紙テストの形でプレースメントテストを実施する日を設定し学習者のトラブルに対応できる体制をとった。今後数年間はオンラインテストと紙テストを並行して行う予定であるが、オンラインテストが軌道にのれば紙テストの実施は終了することになる。

1-5 複数キャンパスへの対応

九州大学は、箱崎、馬出、大橋、筑紫、伊都の5つのキャンパスからなる。日本語コースが開講されているのは箱崎、伊都、筑紫、大橋の4キャンパスである。

2010年度の秋学期からグローバル30プログラム（以下G30）が伊都キャンパスで開始され伊都キャンパス JLCs の中上級受講者数が増加する可能性があったため、今年度は伊都キャンパスでJ5およびJ6を開講した。

表4に各キャンパスで開講された日本語コースの内容、レベルおよび1週間あたりの授業回数をまとめる。

表4 各キャンパスで開講された日本語コース

キャンパス	開講コース	開講レベル	1週間当たりの 各クラスの授業回数
箱崎	総合(J)	1～8	1～4レベル：3回 5～7レベル：2回 8レベル：1回
	漢字(K)	2～8	2回
	会話(S)	2～8	2回
	作文(W)	6, 7	2回
	読解(R)	7, 8	2回
	専門(T)	8	1回
伊都	総合(J)	1～6	1～4レベル：3回 5～6レベル：2回
筑紫・大橋	総合(J)	初級前半	2回
		初級後半	2回
		中級	2回

2. 受講者数および受講者の内訳

2-1 受講者数

図1は2002年度（平成14年度）以降の学習者数の推移である。

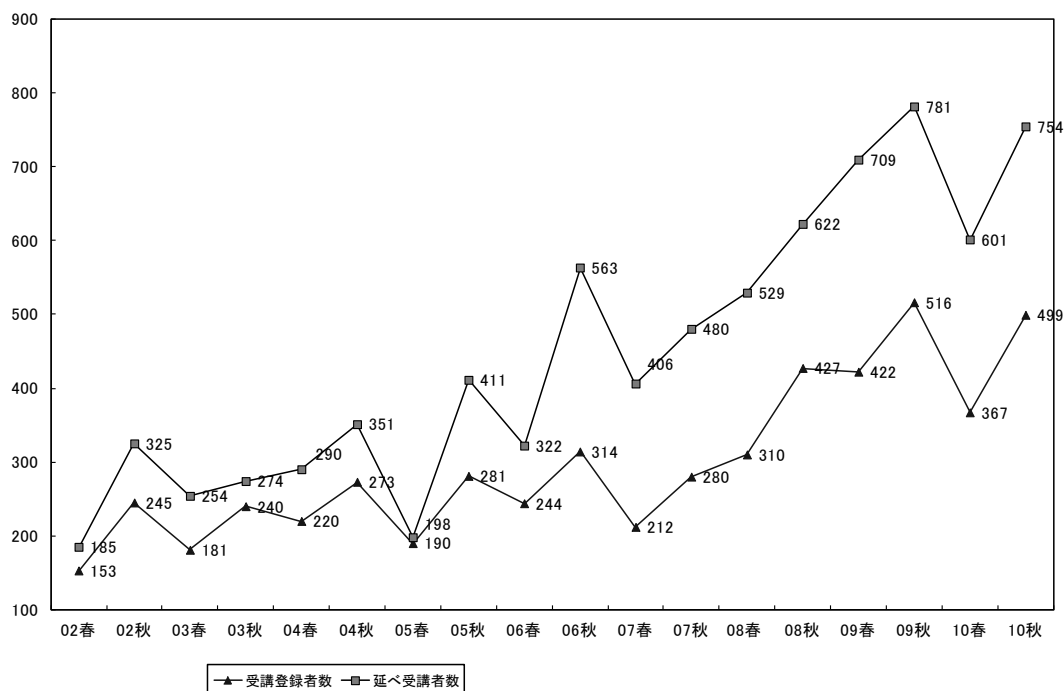


図1 JLCs 受講者数の推移

本稿1章でも述べたが、約3年間の間にJLCs学習者数が急増し2009年度は延べ受講者数が781名に達した。しかし当センターの規模ではこれ以上の学習希望者の受け入れが困難であるため、2010年度春学期から受講者に優先順位を設けた。

2010年度の春学期は前年度春学期に比べ受講登録者数が55名の減少、延べ受講者数が108名の減少となった。春学期に関しては優先順位を設けるといふ対応は効果があったと言えよう。しかし秋学期は受講登録者数は対前年17名の減少、延べ受講者数は27名の減少に留まった。留学生の多くは秋学期に来学しており、「来学1年以内の者が優先的に受講できる」とした条件に大多数の学生が該当したためであると考えられる。

今後も受講希望者は増加するであろうと予測されるが、当センターの現体制ではコースの規模を拡大することは困難である。組織のあり方を見直すとともに受講優先順位の内容を再検討していく必要がある。

2-2 受講者の内訳

下に受講者の所属（表5）、身分（表6）、受講暦（表7）、出身地域（表8）をまとめる。

学習者の所属については、留学生センターに所属する学習者が春学期では全体の22.1%、秋学期は16.6%を占めており、全学補講コースとはいっても当センター所属の学習者が最も多いことが分かる。

表5 受講者の内訳（所属別）

所 属	春学期		秋学期		所 属	春学期		秋学期	
	人数	%	人数	%		人数	%	人数	%
留学生センター	81	22.1%	83	16.6%	歯学府・歯学部	6	1.6%	6	1.2%
人文科学府・文学部	21	5.7%	16	3.2%	薬学府・薬学部	1	0.3%	3	0.6%
比較社会文化学府	19	5.2%	30	6.0%	工学府・工学部	57	15.5%	80	16.0%
人間環境学府・教育学部	19	5.2%	36	7.2%	芸術工学府・芸術工学部	24	6.5%	26	5.2%
法学府・ロースクール・法学部	31	8.4%	53	10.6%	システム情報科学府	26	7.1%	39	7.8%
経済学府・ビジネススクール・経済学部	33	9.0%	55	11.0%	総合理工学府	2	0.5%	5	1.0%
理学府・理学部	3	0.8%	2	0.4%	生物資源環境科学府・農学部	30	8.2%	39	7.8%
数理学府	3	0.8%	5	1.0%	システム生命科学府	4	1.1%	6	1.2%
医学系学府・医学部	3	0.8%	8	1.6%	その他	4	1.1%	7	1.4%

学習者の身分（表6）は例年通り研究生および大学院生（修士課程・博士課程）が多い。九州大学においては研究が英語で行われる場合が多く、来学時点では日本語が全く分からない大学院生や研究生も少なくない。しかし生活の場では日本語が必要でありそのためにJLCsの受講を希望する学習者が多い。また、研究室の日本人学生たちとのコミュニケーションを日本語で行いたいという希望も多い。

表6 受講者の内訳（身分別）

身 分	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
研究生	109	29.7%	136	27.3%
修士課程学生	76	20.7%	104	20.8%
博士課程学生	60	16.3%	125	25.1%
交換留学生	28	7.6%	30	6.0%
Japan in Today's World Program 生	52	14.2%	40	8.0%
日本語・日本文化研修コース生	28	7.6%	29	5.8%
日本語研修コース生	9	2.5%	5	1.0%
日韓理工系プログラム	0	0.0%	7	1.4%
福岡市・広州市交流プログラム	1	0.3%	1	0.2%
その他の身分の学生	2	0.5%	6	1.2%
訪問研究員	2	0.5%	16	3.2%
計	367	100.0%	499	100.0%

受講歴（表7）については、例年、春学期は継続受講者が多く秋学期は新規の受講者が多い。秋学期に日本に来る留学生が多いためである。

表7 受講者の内訳（受講歴別）

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
新規受講者	119	32.4%	355	71.1%
継続受講者	248	67.6%	144	28.9%
計	367	100.0%	499	100.0%

出身地域（表8）は、1年を通して中国・台湾が最も多く、例年、受講者全体の半数近くを占める。また、その他のアジア各国からの留学生を合わせると、アジア出身の留学生で受講者の8割を占めることになる。アジア地域との交流に力を入れている九州大学の特徴が表れていると言える。

表8 受講者の内訳（出身地域別）

出 身	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
中国・台湾	174	47.4%	264	52.9%
韓国	47	12.8%	51	10.2%
他アジア	69	18.8%	111	22.2%
ヨーロッパ	37	10.1%	47	9.4%
北米	18	4.9%	10	2.0%
その他	22	6.0%	16	3.2%
計	367	100.0%	499	100.0%

3. 受講者による授業評価

JLCsでは、春学期末（7月）と秋学期末（2月）に学習者による授業評価を行っており、コース終了日までに学習者がオンラインシステムで評価を入力する。結果はクラス担当教員にフィードバックされ授業を改善する際の参考資料としている。以下に2010年度（平成22年度）の結果をまとめる。

3-1 授業について

(1) 授業の難易度

質問：この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

- | | | |
|----------|----------|-----------|
| a. 易しい | b. やや易しい | c. ちょうどよい |
| d. やや難しい | e. 難しい | |

表 9 授業の難易度

			易しい	やや易しい	丁度よい	やや難しい	難しい
総 合	初 級	春学期	1.8%	22.7%	56.4%	18.2%	0.9%
		秋学期	2.2%	20.1%	61.9%	13.7%	2.2%
	中上級	春学期	1.0%	15.3%	59.2%	23.5%	1.0%
		秋学期	0.7%	32.6%	57.8%	8.9%	0.0%
漢 字		春学期	2.8%	19.4%	61.1%	16.7%	0.0%
		秋学期	2.4%	29.3%	46.3%	17.1%	4.9%
会 話		春学期	7.4%	19.1%	55.9%	17.6%	0.0%
		秋学期	5.2%	18.2%	64.9%	10.4%	1.3%
読 解		春学期	0.0%	12.5%	75.0%	12.5%	0.0%
		秋学期	0.0%	34.8%	43.5%	21.7%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	27.3%	72.7%	0.0%	0.0%
		秋学期	16.7%	16.7%	50.0%	16.7%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	0.0%	81.8%	18.2%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%

(2) 宿題の量

質問：宿題の量は適当でしたか。

- a. 少ない b. やや少ない c. 適量
d. やや多い e. 多い

表10 宿題の量

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	2.7%	9.1%	75.5%	11.8%	0.9%
		秋学期	0.7%	10.1%	74.8%	13.7%	0.7%
	中上級	春学期	0.0%	0.0%	86.7%	10.2%	3.1%
		秋学期	2.2%	3.0%	85.9%	8.1%	0.7%
漢 字		春学期	2.8%	13.9%	66.7%	16.7%	0.0%
		秋学期	0.0%	12.2%	65.9%	19.5%	2.4%
会 話		春学期	7.4%	11.8%	75.0%	4.4%	1.5%
		秋学期	7.8%	9.1%	71.4%	11.7%	0.0%
読 解		春学期	0.0%	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	95.7%	4.3%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	9.1%	81.8%	9.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%

(3) 授業の回数

質問：1週間の授業回数は適当でしたか²⁾

- a. 少ない b. やや少ない c. 適量
d. やや多い e. 多い

表11 授業の回数

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	5.5%	16.4%	74.5%	3.6%	0.0%
		秋学期	2.9%	15.8%	73.4%	7.9%	0.0%
	中上級	春学期	0.0%	10.2%	89.8%	0.0%	0.0%
		秋学期	2.2%	3.0%	92.6%	2.2%	0.0%
漢 字		春学期	2.8%	19.4%	75.0%	2.8%	0.0%
		秋学期	2.4%	0.0%	92.7%	4.9%	0.0%
会 話		春学期	4.4%	16.2%	79.4%	0.0%	0.0%
		秋学期	3.9%	9.1%	85.7%	1.3%	0.0%
読 解		春学期	0.0%	12.5%	87.5%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	4.3%	91.3%	4.3%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	18.2%	81.8%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	0.0%	90.9%	9.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%

(4) 開講期間

質問：コースの長さ（5週間）は適当でしたか。

- a. 少ない b. やや少ない c. 適量
d. やや多い e. 多い

表12 開講期間

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	6.4%	24.5%	65.5%	3.6%	0.0%
		秋学期	0.7%	12.2%	80.6%	6.5%	0.0%
	中上級	春学期	1.0%	7.1%	88.8%	3.1%	0.0%
		秋学期	1.5%	6.7%	83.7%	6.7%	1.5%
漢 字		春学期	2.8%	5.6%	86.1%	5.6%	0.0%
		秋学期	4.9%	9.8%	73.2%	12.2%	0.0%
会 話		春学期	2.9%	17.6%	77.9%	1.5%	0.0%
		秋学期	3.9%	3.9%	83.1%	9.1%	0.0%
読 解		春学期	12.5%	12.5%	62.5%	12.5%	0.0%
		秋学期	0.0%	13.0%	87.0%	0.0%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	9.1%	90.9%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%

(5) 授業の進度

質問：授業のスピードは適当でしたか。

- a. 遅い b. やや遅い c. 適当
d. やや速い e. 速い

表13 授業の進度

			遅い	やや遅い	適当	やや速い	速い
総 合	初 級	春学期	5.5%	10.9%	64.5%	19.1%	0.0%
		秋学期	0.7%	20.1%	61.2%	17.3%	0.7%
	中上級	春学期	1.0%	8.2%	86.7%	4.1%	0.0%
		秋学期	2.2%	14.1%	80.0%	3.7%	0.0%
漢 字		春学期	0.0%	13.9%	83.3%	2.8%	0.0%
		秋学期	2.4%	4.9%	82.9%	7.3%	2.4%
会 話		春学期	2.9%	8.8%	80.9%	5.9%	1.5%
		秋学期	1.3%	13.0%	83.1%	2.6%	0.0%
読 解		春学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	95.7%	4.3%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	18.2%	72.7%	9.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	9.1%	81.8%	9.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%

(6) 1クラスあたりの受講者数

質問：クラスの大きさ（学生の数）は適当でしたか。

- a. 少ない b. やや少ない c. 適量
d. やや多い e. 多い

表14 1クラスあたりの受講者数

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総 合	初 級	春学期	0.0%	1.8%	90.0%	8.2%	0.0%
		秋学期	0.7%	1.4%	78.4%	17.3%	2.2%
	中上級	春学期	0.0%	3.1%	85.7%	11.2%	0.0%
		秋学期	1.5%	1.5%	84.4%	10.4%	2.2%
漢 字		春学期	0.0%	5.6%	88.9%	5.6%	0.0%
		秋学期	2.4%	2.4%	95.1%	0.0%	0.0%
会 話		春学期	1.5%	4.4%	79.4%	11.8%	2.9%
		秋学期	1.3%	3.9%	79.2%	15.6%	0.0%
読 解		春学期	12.5%	25.0%	62.5%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	13.0%	82.6%	4.3%	0.0%
作 文		春学期	0.0%	63.6%	27.3%	9.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	16.7%	83.3%	0.0%	0.0%
専 門		春学期	0.0%	0.0%	81.8%	18.2%	0.0%
		秋学期	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%

開講されたコースは、全項目において全体的にはほぼ適当であったといえる。

専門コースは、秋学期の受講者数が少なかったため回答に偏りがみられる結果となった。しかし偏

りがみられるといっても「開講期間」について「適量」であるという回答がなかったことは重くうけとめるべきであろう。専門コースの開講期間については再度検討する必要がある。

また、読解コースおよび作文コースの「学生数」であるが、春学期および秋学期ともに「やや少ない」という回答数が目立った。その一方で、総合コースでは「やや多い」という回答が少なからず見られた。一般的に、作文や読解といった技能コースより文法学習を中心とした総合コースの受講を希望する学習者が多いため、コースによって受講者数に格差が生じる傾向がある。この格差を解消する方法を検討していく必要があるのではないか。

3-2 学習者の自己評価

(1) 予習にかかる時間

質問：授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。 毎回平均_____時間ぐらい

表15 予習時間

*() 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	2.0	2.4	1.6	1.9	2.0	6.7	1.1
秋学期	2.2	1.1	1.7	1.2	1.2	1.1	0.7

(2) 復習にかかる時間

質問：授業の復習するのにかかった時間はどれぐらいでしたか。 毎回平均_____時間ぐらい

表16 復習時間

*() 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	2.1	2.2	1.3	1.5	2.1	8.1	0.9
秋学期	2.1	1.2	1.4	1.0	1.3	1.3	0.7

予習時間および復習時間については、どのコースも予習と復習に1～3時間程度費やしている。例年ほぼ同時時間の自習時間を確保している学習者が多い。

3-3 教師に対する評価

各項目ともに、数値が高いほど高い評価である。最大値は4.0で、3.0以上が目安となる。

(1) 授業時間の厳守

質問：授業は時間どおり行われましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表17 授業時間の厳守

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	3.4	3.5	3.4	3.4	3.5	3.3	3.5
秋学期	3.2	3.4	3.4	3.6	3.6	3.7	3.5

(2) 教育への熱意

質問：教師に授業への熱意が感じられましたか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表18 教育への熱意

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	3.5	3.7	3.5	3.7	3.6	3.6	3.6
秋学期	3.5	3.4	3.6	3.5	3.5	3.8	4.0

(3) 授業の準備

質問：(教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

- a. 強くそう思う (4.0) b. そう思う (3.0) c. どちらとも言えない (2.0)
d. そう思わない (1.0) e. 全くそう思わない (0.0)

表19 授業の準備

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	3.6	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.7
秋学期	3.6	3.4	3.5	3.5	3.5	3.7	4.0

(4) 説明の分かりやすさ

質問：先生の指示・説明はどうでしたか。

- a. とてもわかりやすかった (4.0) b. わかりやすかった (3.0)
c. どちらとも言えない (2.0) d. 少しわかりにくかった (1.0)
e. わかりにくかった (0.0)

表20 説明の分かりやすさ

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	3.4	3.4	3.4	3.6	3.4	3.5	3.5
秋学期	3.3	3.2	3.4	3.5	3.5	3.7	3.5

どのコースも全項目で3以上の評価を得ており、当センターの日本語コースは今年度も学習者から高い評価を得ているといえる。また、春学期・秋学期ともにほぼ同数値の評価を得ていることから、教員が安定した内容を提供していることが分かる。

3-4 総合評価

数値が高いほど評価が高いといえる。最大値は100%で、80%以上が一応の目安である。

質問：あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 _____%

表21 総合評価

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文	専 門
春学期	88.4	77.3	89.4	88.4	87.3	92.4	92.1
秋学期	89.2	81.2	88.5	85.2	92.0	91.8	92.5

中上級レベル以外のコースでは春学期・秋学期ともに80%以上の評価となっており、担当教員が質の高い授業を提供していることが分かる。中上級レベルについては春学期の評価が若干低かった。このレベルは他コースに比べ授業に求めるものが学習者によってかなり異なるため、ニーズの異なる学習者すべてが満足できる授業内容を提供することが大変困難である。そのため、他コースに比べ、評価が若干低くなったと考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題としては以下の点を挙げることができる。

1) 学習者数増加への対応

今年度より優先順位を設けてJLCsの受講者を受け入れた。しかし春学期に効果がみられたものの秋学期は大きな効果をあげることができなかった。来年度は、今年度の現状を踏まえ再度学習者の受け入れについて見直す必要がある。

見直すべき点の1つとして、当センターとしてJLCsに他部局所属の学生をどの程度まで受け入れるべきかという課題をあげることができる。当センターは全学共同利用施設であり可能な限り他部局所属の留学生も受け入れるべきではあるが、同時に、当センター所属の留学生に対し質の高い日本語授業を提供する義務を負う。両者が両立する限りにおいては問題がないが、近年のようにJLCs受講者数が当センターで対応できる人数を超えた状態となると、授業の質的な低下が懸念されかねない。

この問題はJLCsだけでなく九州大学として留学生にどのようなスタンスを取るかの問題でもあるため、全学レベルで検討される必要があるのではないか。

2) オンラインプレースメントテストの検証

2010年度（平成22年度）の秋学期よりオンラインプレースメントテストを開始した。初年度は大きな問題はみられなかったが、まだシステム全体としては未完成であり開発途上の個所が残されている。その1つが学習者の日本語レベルの自動判定機能であり、来年度に向けこの機能を完成させたいと考えている。

また、今年度試行的に設定したレベル判定の得点目安が適切なものであったか検証し、より正確な判定基準を設定していく必要がある。

参考文献

大神智春（2010）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』第19号 pp.57-70

小森和子（2010）「プレースメントテストのオンライン化の試みと問題項目の分析評価」『九州大学留学生センター紀要』第19号 pp.89-106

注

1) 大神（2010）を参照。

2) 各コースの1週間当たりの授業回数は表1にまとめてある。

広州市研修生プログラム

大 神 智 春*

1. はじめに

広州市研修生プログラムは、福岡市と中国広州市との友好都市交流の一環として1984年度（昭和59年）に開始された。毎年1名の日本語研修生が広州市から派遣され九州大学の留学生センターで日本語を学習するとともに、福岡市の市役所で実務レベルの研修を行っている。

2. 概要

2-1 プログラム実施期間

2007年度（平成19年度）までは研修期間は半年間であったが、2008年度より1年間となった。2010年度の研修期間は2010年4月1日から2011年3月31日までである。

2-2 プログラムの内容

派遣される研修生の日本語レベルはゼロ初級から上級レベルまで年によって様々である。そのため、毎年派遣されてきた研修生の日本語レベルを診断し、研修生にあった1年間のカリキュラムを組み立てている。以下は2010年度（平成22年度）の研修生についての報告である。

3. 2010年度（平成22年度）の広州市研修生プログラム

3-1 2010年度（平成22年度）春学期

研修生の日本語レベルがほぼゼロ初級であったことから、最も効果的に日本語教育を行うため、日本語研修コースで開講している次の授業に参加することにした¹。

1) 受講したコース

- | | |
|--------------------|---------------|
| ① J1（ゼロ初級総合日本語コース） | ② 夏季ラウンド研修コース |
| ③ K1（初歩漢字コース） | ④ S1（初歩会話コース） |

上にあげた4種類のコースのほかに、研修コースが実施している各種行事（見学旅行、小学校訪問）にも参加することができた。

*九州大学留学生センター准教授

1 2010年度の研修コースの詳細については吉川（2012）を参照。

2) 使用教材

- ① J1:『初級日本語げんきⅠ』
- ② 夏季ラウンド研修コース:『初級日本語げんきⅡ』
- ③ K1:『初級日本語げんきⅠ 読み書き編』、プリント教材
- ④ S1:『初級日本語げんきⅠ』、プリント教材

3-2 2010年度(平成22年度)秋学期

春学期に研修コースを修了し、秋学期はJLCsで以下の日本語コースを受講した。

1) 受講したコース

- ① J3(初級後半総合日本語コース)
- ② K5(中級入門漢字コース)
- ③ S3(初級後半会話コース)

2) 使用教材

- ① J3:『初級日本語げんきⅡ』
- ② K5:『Basic Kanji Book vol.2』
- ③ S3:『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』

尚、広州市研修生プログラムのコーディネーター本人がK5を担当していたため、1ヶ月に1度ほど授業の後で面談を行い日本語学習や日本での生活について問題がないか確認した。

4. 今後の課題

昨年度までは研修生との面談は定期的に行うわけではなく研修生の日本語学習状況等に応じて臨機応変に実施してきた。今年度も結果的にはほぼ1ヶ月に1度の割合で実施することになったが、特に面談を義務と課していたわけではない。

しかし、今年度1ヶ月に1度ほど面談を行うことで、より丁寧に研修生のニーズに対応することができた。研修生の生活状況や日本語学習状況をきめ細かく把握し状況に応じて適切な対応をするには定期的に面談を実施した方がいいと考えられる。

また、研修生の本プログラム参加の目的が日本語学習であるため、今年度までは日本語の学習のみに力を入れてきた。しかし、日本語学習以外の目標も設定することができれば、研修生が日本で様々な経験を積みそれを帰国後の業務に役立てていく上でより効果が上がるのではないかと考えられる。例えば、来学時に何か1つ1年間かけて知識を得たいテーマなどを設定し、研修修了時にそのテーマについてのレポートなどを書かせる、などの活動をするのも1つの方法ではないかと考えられる。

参考文献

吉川裕子(2012)「日本語研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第20号

日本語 CAI (Computer Assisted Instruction) コース

鹿 島 英 一*

CAI コースは、通常の補講コース（週2回以上）と時間的に合わない、定期的な時間が取れない、来日時期が通常と異なる、など諸事情のある本学の留学生や客員研究員を対象とした日本語補講コースで、学習内容の入ったコンピュータの使い方を理解し、各学習者が自分に合った進捗と目的に応じて、学習できる点に特徴がある。

初歩からサバイバルが可能なレベルまで対応できるだけでなく、中級レベルなどに達した（漢字圏出身などの）既習者にもコンピュータで復習できる充分好い機会にもなる。担当教員は（機材の使い方の外に）教室で、各学習者個人からの日本語やその学習方法に関する質問にも細かく対応している。尚、コース選択はニーズに応じてある程度柔軟に対応している。

平成22年度のコース概要は以下のとおりである。

後期：平成22年10月13日～平成22年12月22日

CAI 水曜日 13:00～14:30（第3時限）

担当教員：鹿島英一

教室：情報サロン室（留学生センター1F）

定員：学習に利用可能なコンピュータの台数（5台）。

教材：以下の7種類。

1. ひらがな (HIRAGANA)
2. かたかな (KATAKANA)
3. 漢字 (KANJI)—— 漢太郎 (KANTARO) 1
4. 漢字 (KANJI)—— 漢太郎 (KANTARO) 2
5. 漢字 (KANJI)—— 漢太郎 (KANTARO) 3
6. 動詞活用 (Verbal Conjugations)—— まなびや (Manabiya)
7. 中級入門までの総合練習 (General Japanese Drills up to Intermediate Learners)

申込方法：留学生センター（箱崎キャンパス）の留学生センターの情報サロン室（教室）で、所定の申請用紙に書き込んで、担当教員に直接提出する。

*九州大学留学生センター教授

概要：学習者ニーズの多様化が一層進んでいる。ひらがなの既習を前提とすることも今はない。また、いつからでも、また可能な時だけでも参加できる。学習者数は5名程で、学習者のレベルは極く初級から比較的高い中級（復習）までバラエティに富んでおり、進度もコースの目的に沿ったものであった。

学習者は通常の補講コース（JLC：週2回以上）と併用する者が最近は多い。また、日本語の漢字の読みの学習に違和感を示さない漢字圏出身者も増えている。尚、箱崎地区から伊都地区へのキャンパス移転が進展して以来、後期だけ開設している。

オンラインプレースメントテスト問題項目の分析評価

齊 藤 信 浩*

1. はじめに

九州大学留学生センターにおいて、初めてオンラインでのプレースメントテストが実施運用されたのは、2010年10月4日から11日の8日間である。この際、オンラインテストを受講したのは九州大学に在籍する大学院生、研究生、交換留学生などであり、箱崎キャンパス181名、伊都キャンパス68名の合計249名が受験している。小森（2011）のデータはこの2010年の Round 3（以下2010_R3）¹⁾ 開始時のオンラインプレースメントテストの結果を分析したものである。この小森（2011）の分析結果は、オンラインプレースメントテストの配点基準の設定に大きく寄与している。しかしながら、2010年春の予備調査と2010_R3のオンラインプレースメントテストの結果のみでは、問題項目の妥当性やレベル判定の配点基準が果たして正しいものであるのか、結論付けるには証拠となるデータが少ない。この調査については、年度を越えて引き続き追調査を行い、レベル判定の配点基準や問題項目の妥当性を確証のあるものに発展させて行かなければならない。

2011年度に入り、オンラインでのプレースメントテストは2011年4月1日から12日に Round 1（以下、2011_R1）のプレースメントテストが行われ、箱崎キャンパス153名、伊都キャンパス59名が受験し、2011年5月20日から6月2日には Round 2（以下、2011_R2）のプレースメントが行われ、箱崎キャンパス52名、伊都キャンパス19名が受験した。この結果、現在まで3回分のテストデータが揃ったことになる。本調査では、既に分析された小森（2011）の2010_R3の結果に対する追調査というかたちで、2011_R1と2011_R2のデータを2010_R3のデータと照合させながら、オンラインプレースメントの結果と配点基準の妥当性を検証するのが目的である。

2. 予備実験における新プレースメントテストの配点の設定

オンライン化の導入の前に、2010年4月中旬から5月上旬にかけて予備実験が行われている。この予備実験では2010年4月8日から開講されている日本語の授業（以下、JLCs）のJ1からJ8のクラス²⁾の中から希望者84名を被験者として募り、オンラインで新プレースメントテストを受験させている。この予備実験の得点を目安にし、オンラインプレースメントテストのレベル分けのための配点基準が設定された。本追調査の主な目的はこの際に設定されたレベル分けの基準点が、有効に機能しているかどうかを検証し、その基準点に不備があった場合において新規の配点基準を提起することである。

*九州大学留学生センター講師

従って、本節では、再度、小森（2011）で議論され、設定された新ブレースメントテストの配点設定の議論を取り上げる。以下、小森（2011）からこの予備実験における新ブレースメントテストの得点を再掲し、表1に示す。

その結果を元に設定された配点が以下、表2である。表2の配点はRound 1とRound 3に使用される配点基準であり、Round 2とRound 4はこれより3～6点高い配点に設定してある³⁾。なお、表1の予備実験での聴解は21問があるが、試験時間を軽減する目的から、2010_R3の本試験からは18問に減らすという調整が行われている。

現在、J6以上のレベル判定は文法テストの結果を参照していない。これに関しては次のような理由がある。まず、予備実験の結果で文法のJ4とJ5の差が見られなかったこと、J6とJ7の得点に逆転が見られたこと、即ち、J5以上については文法テストの得点がJレベルを分けるのに有効に機能していないのではないかという恐れがあったことが理由として挙げられる（表1参照）。また予備実験における読解テストの得点がJ4からJ7にかけて不安定だったということも理由として挙げられる（表1参照）。

表1 予備実験における新ブレースメントテストの得点（小森、2011：92）

	文法（60点満点）		聴解（21点満点）		読解（38点満点）	
	M	SD	M	SD	M	SD
J-1	5.08	(4.56)	1.45	(1.75)	2.00	(2.88)
J-2	22.70	(6.90)	4.00	(3.28)	7.50	(6.28)
J-3	37.11	(6.10)	7.07	(4.58)	11.67	(5.63)
J-4	42.00	(5.39)	7.33	(4.27)	20.67	(3.06)
J-5	42.17	(13.85)	10.17	(3.19)	17.00	(NA)
J-6	48.45	(8.45)	10.50	(2.17)	27.00	(4.24)
J-7	47.33	(5.51)	15.50	(3.54)	19.50	(10.61)
J-8	53.00	(6.44)	18.67	(1.15)	28.00	(NA)
	33.93	(16.92)	6.94	(5.69)	10.60	(8.63)

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

表2 2010年秋学期の各レベルの得点の目安

文法（60点満点）			聴解（18点満点）		読解（38点満点）			漢字（60点満点）		
J-level	最低点	最高点	J-level	最低点	J-level	最低点	最高点	K-level	最低点	最高点
1	0	12	1		1					
2	13	24	2		2			2	0	9
3	25	36	3		3			3	10	17
4	37	44	4		4			4	18	25
5	45	48	5		5			5	26	33
6			6	10	6	10	25	6	34	43
7			7	12	7	12	31	7	44	50
8			8	14	8	14	38	8	51	60

旧プレースメントテスト（ペーパー方式によるプレースメントテスト）では、初級を文法の得点で分け、中上級は読解の得点で分けるという方式を採っていたため、予備実験の数値の不安定性からも、この旧プレースメントテストの方式の名残りをオンラインシステム上にも残し、J6以上の判定は聴解テストと読解テストの基準点を参照して、レベル判定をすることとなった。

3. 文法・聴解・読解の各テストの分析

3.1. 信頼性の検定

配点基準が設定された後、本テストが2010_R3、2011_R1、2011_R2の3回、実施された。本節では3回の本テストの得点をテスト項目とJレベルごとに比較し、その得点の妥当性を論じる。

まず、2011_R1の文法テスト、聴解テスト、読解テストの信頼性係数（クロンバックのアルファ信頼度係数）を算出したところ、文法テストが $\alpha=.830$ 、聴解テストが $\alpha=.818$ 、読解テストが $\alpha=.877$ となり、いずれも極めて高い信頼度が得られた。2011_R2も同様に信頼度係数を算出したところ、文法テストが $\alpha=.803$ 、聴解テストが $\alpha=.851$ 、読解テストが $\alpha=.921$ となり、いずれも極めて高い信頼度が得られ、これらのテストの高い信頼性が確認された。

3.2. 文法テストの分析

以下、各テストの議論に入っていく。表3は文法テストにおける2010_R3、2011_R1、2011_R2の得点の平均値と標準偏差を示し、2010_R3と2011_R1の平均値を t 検定によって比較検討したものである。2011_R2は前述したように、配点基準がR1とR3と異なっていること、及び母集団の数にかなりの差があることを考慮し、他のテストとの t 検定による比較はせず、参考値として並置させた。

文法テストにおいては、2010_R3と2011_R1の比較において、J2では5%水準で差が見られ [$t(66)$

表3 文法テストにおける2010_R3、2011_R1、および2011_R2の得点

文法 (60点満点)							
	2010_R3		2011_R1		t 値	2011_R2	
	M	SD	M	SD		M	SD
J-1	13.00	(8.12)	5.58	(7.29)	<i>n.s.</i>	9.00	(7.55)
J-2	22.51	(6.64)	18.50	(4.13)	*	25.86	(4.91)
J-3	34.93	(6.15)	30.38	(4.60)	**	36.00	(3.24)
J-4	41.98	(3.41)	41.29	(2.94)	<i>n.s.</i>	43.55	(3.30)
J-5	48.30	(4.39)	47.93	(2.57)	<i>n.s.</i>	49.83	(2.97)
J-6	51.38	(3.35)	51.68	(4.57)	<i>n.s.</i>	53.60	(2.07)
J-7	52.63	(2.76)	53.50	(2.96)	<i>n.s.</i>	53.75	(1.50)
J-8	53.83	(3.45)	54.63	(3.54)	<i>n.s.</i>	55.50	(0.71)
	37.33	(15.88)	39.16	(13.70)		43.09	(11.92)

注：M は平均、SD は標準偏差、 $p < .05^*$ 、 $p < .01^{**}$ 、not significant (*n.s.*)

= 2.057, $p < .05$], J3でも 1 %水準で得点の差が観察され [$t(103) = 3.11, p < .01$], J2と J3の文法の得点は2010_R3と2011_R1の間で揺れが見られた。しかし、J1および J4以上では有意差が現れず、全て近似した得点になった。2011_R1の各レベル間の得点の伸長も、J1から J8にかけて文法テストの得点は暫時伸びており、文法テストは各レベルの差を弁別するのに有効に貢献しているようである。この因果関係についての議論は 5 章で重回帰分析によって検証する。

2011_R2の文法の得点は2010_R3、2011_R1と比べて、どのレベルでも点数が高く、全体の平均点でも高い結果となっている。Round 2および Round 4のプレースメントテストは、本来的なレベル分けのためのテストという側面と同時に、学期途中で上のクラスへのスキップを認定するかどうかを判断するという側面もあり、上級クラスへ編入したい学生が挑戦的に受験している。そのため、Round 1と Round 3よりも能力の高い学生が受験しており、他の回と比して得点が高く出たのは寧ろ妥当な結果であったと言えよう。同様の傾向が聴解、読解、漢字の各テストについても観察されている（以下表 4、表 5 参照）。

3.3. 聴解テストの分析

表 4 は聴解テストにおける2010_R3、2011_R1、2011_R2の得点の平均値と標準偏差を示し、2010_R3と2011_R1の得点の平均を t 検定で比較したものである。

聴解テストは J4においてのみ、得点に有意差が見られ [$t(101) = -2.156, p < .05$], 2011_R1の方が高い得点となっている。しかし、全体としては文法テストと同様に、2010_R3と2011_R1の得点は J4を除いては有意差が見られず、全て近似した結果となっている。

2011_R1は J4から J8にかけてほぼ 1 ~ 1.5点前後の間隔で推移しており、ほぼ等間隔で推移している。2011_R2においては、J4から J6にかけて、得点の逆転現象が見られ、また、J6と J7の間の得点差が4.15点も離れており、不安定な結果となっている。2011_R1と2011_R2の結果から、J6と J7の間のレベル判定は機能しているようであるが、J4から J6までのレベル判定は不十分であり、このレベルの弁

表 4 聴解テストにおける予備実験得点と2011_R1および R2の得点

聴解 (18点満点)	2010_R3		2011_R1		t 値	2011_R2	
	M	SD	M	SD		M	SD
J-1	2.89	(8.12)	2.00	(2.49)	<i>n.s.</i>	2.67	(2.08)
J-2	4.46	(6.64)	6.00	(3.51)	<i>n.s.</i>	5.67	(3.45)
J-3	6.27	(6.15)	6.46	(2.91)	<i>n.s.</i>	7.44	(3.94)
J-4	8.00	(3.41)	9.20	(3.84)	*	10.73	(3.29)
J-5	9.56	(4.39)	10.00	(3.57)	<i>n.s.</i>	11.71	(2.69)
J-6	12.45	(3.35)	11.82	(2.79)	<i>n.s.</i>	10.40	(2.30)
J-7	13.44	(2.76)	13.89	(2.11)	<i>n.s.</i>	14.25	(0.96)
J-8	13.81	(3.45)	14.88	(1.81)	<i>n.s.</i>	15.50	(0.71)
	7.96	(4.60)	9.00	(4.35)		10.13	(4.05)

注：M は平均、SD は標準偏差、 $p < .05$ *, $p < .01$ **、not significant (*n.s.*)

別には聴解はあまり有効に機能していないように思われる。

3.4. 読解テストの分析

表5は読解テストにおける2010_R3、2011_R1、2011_R2の得点の平均値と標準偏差を示したものである。

読解テストにおいては、J4レベルで [$t(101) = -2.421, p < .05$] となり、J8レベルで [$t(30) = -2.597, p < .05$] となり、それぞれ5%水準で有意差が見られた。他のレベルでは有意差が見られず、2010_R3と2011_R1は近似した得点となった。

2010_R3ではJ7とJ8の間に得点の逆転現象が見られ、読解テストの不安定性が指摘されていたが、2011_R1と2011_R2では各レベルとも2～2.5点の等間隔で推移している。但し、2011_R1はJ5のみが他の回のオンラインプレースメントテストの得点、および、前後レベルの得点に比して、平均点18.68(標準偏差5.56)と、著しく低い点数が現れている。予測として、この現象は2011_R1における特殊な現象であると考えられ、読解テスト全体の信頼度とは関係のない現象だと思われる。

2011_R1と2011_R2のレベルごとの平均点の推移を見ると、J5以上のレベル差の判定には問題なく寄与しているように見える。この因果関係は5章で再分析する。

4. 学習者特性による分析—漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の分類—

4.1. 文法得点の差の分析

被験者を漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の3つに大別し、各Jレベルを分析して行く。ここでは加納(2011)に倣い、漢字圏は中国、台湾、香港、準漢字圏は韓国、非漢字圏はそれ以外の地域の出身者というように分類した。以降の各表においても、小森(2011)の分析結果の表を引用し、再掲し、本調

表5 読解テストにおける予備実験の平均点と2011_R1およびR2の平均点

読解 (38点満点)	2010_R3		2011_R1		<i>t</i> 値	2011_R2	
	M	SD	M	SD		M	SD
J-1	5.02	(6.17)	3.64	(6.30)	<i>n.s.</i>	3.33	(2.51)
J-2	10.07	(7.68)	10.82	(5.39)	<i>n.s.</i>	9.17	(7.41)
J-3	14.16	(6.58)	13.17	(6.35)	<i>n.s.</i>	15.33	(7.84)
J-4	17.31	(6.94)	19.64	(7.00)	*	20.45	(5.24)
J-5	19.62	(5.48)	18.68	(5.56)	<i>n.s.</i>	23.87	(4.74)
J-6	25.13	(4.48)	23.00	(5.21)	<i>n.s.</i>	26.40	(4.45)
J-7	26.53	(4.90)	27.72	(3.30)	<i>n.s.</i>	29.75	(1.71)
J-8	26.27	(5.97)	30.50	(4.87)	*	32.50	(0.71)
	16.61	(9.14)	17.84	(8.28)		20.58	(8.57)

注：Mは平均、SDは標準偏差、 $p < .05$ *, $p < .01$ **、not significant (*n.s.*)

表6 2010_R3 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の文法の平均点（小森（2011）より）

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	11.29	23.84	34.23	41.72	48.00	50.48	52.33	54.30
	SD	7.79	7.95	5.27	3.10	4.19	3.12	2.50	3.83
準漢字圏受験者	M	17.00	24.00	36.00	43.40	49.56	52.67	54.00	55.86
	SD	NA	1.41	NA	1.67	4.64	2.50	2.76	3.13
非漢字圏受験者	M	8.00	19.88	34.80	41.96	51.08	55.00	55.50	53.17
	SD	8.89	4.50	8.21	4.12	4.23	4.00	2.52	3.19
全 体	M	13.00	22.51	34.93	41.98	48.30	51.38	52.63	53.83
	SD	8.12	6.64	6.15	3.41	4.39	3.35	2.76	3.45

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

表7 2011_R1 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の文法の平均点

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	2.50	19.29	30.14	41.31	47.44	51.11	53.20	41.55
	SD	3.70	4.23	5.18	2.53	2.26	4.59	2.97	3.70
	N	4	7	21	32	36	18	10	5
準漢字圏受験者	M		20.20	31.86	42.00	49.00	54.00	54.50	58.00
	SD		4.56	3.98	2.71	3.39	NA	2.26	0.00
	N		5	7	4	5	1	6	2
非漢字圏受験者	M	7.13	17.10	30.10	40.89	48.58	54.33	52.00	55.00
	SD	8.34	3.73	4.27	4.43	2.82	4.93	5.66	NA
	N	8	10	20	9	19	3	2	1
全 体	M	5.58	18.50	30.38	41.29	47.93	51.68	53.50	54.63
	SD	7.29	4.10	4.60	2.94	2.57	4.57	2.96	3.54
	N	12	22	48	45	60	22	18	8

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

査の結果と比較しながら見ていく。

2010_R3ではJ6からJ8にかけての平均値の差が少なく、特に非漢字圏のJ6の55.00（標準偏差4.00）とJ7の55.50（標準偏差2.52）とJ8の53.17（標準偏差3.19）のように、弁別力が弱い結果が表れている。これと同様に、2011_R1においても、準漢字圏ではJ6の54.00（標準偏差NA）と54.50（標準偏差2.26）、非漢字圏ではJ6の54.33（標準偏差4.93）とJ7の52.00（標準偏差5.66）とJ8の55.00（標準偏差NA）のように、弁別力が弱い結果となっている。

4.2. 聴解得点の差の分析

2010_R3と2011_R1の聴解テストの得点は表8、表9のようになった。

聴解テストにおいては、2010_R3では非漢字圏はJ7の13.25（標準偏差1.50）とJ8の11.67（標準偏差3.45）と逆転しており、また漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の全てがJ6とJ7の間での差が小さいという結果となっている。この傾向は2011_R1でも見られ、準漢字圏のJ6の14.00（標準偏差NA）とJ7の14.50（標準偏差0.84）は差が殆ど見られず、非漢字圏においては、J6の12.33（標準偏差1.53）とJ7、J8の得

表8 2010_R3 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の聴解の平均点（小森（2011）より）

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	4.54	4.83	6.51	8.50	9.25	11.90	12.75	13.44
	SD	3.05	3.31	2.29	3.23	3.31	3.55	5.45	2.30
準漢字圏受験者	M	6.00	6.50	11.00	10.20	11.63	14.33	14.50	16.50
	SD	NA	0.71	NA	2.39	1.77	1.97	2.35	0.84
非漢字圏受験者	M	2.10	3.73	5.40	6.53	9.00	12.33	13.25	11.67
	SD	2.73	2.46	3.38	2.41	2.56	2.89	1.50	3.45
全 体	M	2.89	4.46	6.27	8.00	9.56	12.45	13.44	13.81
	SD	3.01	2.92	2.74	3.1	3.05	3.29	3.85	2.98

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

表9 2011_R1 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の聴解の平均点

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	2.25	7.14	7.25	9.50	9.75	11.61	14.10	15.00
	SD	3.30	3.98	2.71	4.09	3.52	2.30	1.97	0.71
	N	4	7	20	32	36	18	10	5
準漢字圏受験者	M		8.6	6.71	11.50	13.60	14.00	14.50	16.50
	SD		2.70	3.99	2.65	1.95	NA	0.84	0.71
	N		5	7	4	5	1	6	2
非漢字圏受験者	M	1.88	3.90	5.53	7.11	9.53	12.33	11.00	11.00
	SD	2.23	2.28	2.55	2.42	3.58	1.53	4.24	NA
	N	8	10	19	9	19	3	2	1
全 体	M	2.00	6.00	6.46	9.20	10.00	11.82	13.89	14.88
	SD	2.49	3.51	2.91	3.84	3.57	2.79	2.11	1.81
	N	12	22	46	45	60	22	18	8

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

点が逆転する結果となっている。

しかし、漢字圏と準漢字圏の間では、2010_R3においても2011_R1においても、J7とJ8の間に得点差が見られ、この聴解テストはJ5とJ6の間と、J7とJ8の間にレベル判定の境界が見られた。

4.3. 読解得点の差の分析

2010_R3と2011_R1の読解テストの得点は表10、表11のようになった。

2010_R3において、漢字圏のJ4からJ5の分別力が弱く、J7とJ8も弱い。非漢字圏のJ5とJ6、J7とJ8の間の分別力も弱いという結果となっている。これに対し、2011_R1でも同様に、漢字圏ではJ4とJ5の分別力が弱く、準漢字圏のJ4の24.25（標準偏差2.50）とJ5の18.40（標準偏差5.41）とが大きく逆転している。また、非漢字圏のJ6からJ8の分別力が弱いという結果が得られた。以上の結果から、読解テストはJ4とJ5の分別には余り有効には機能しておらず、非漢字圏のJ6からJ8の分別力も弱いという結果が見られた。

表10 2010_R3 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の読解の平均点（小森（2011）より）

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	9.00	14.67	16.89	21.09	21.72	26.24	28.33	27.20
	SD	6.67	7.59	5.61	4.95	5.44	2.79	2.06	4.94
準漢字圏受験者	M	12.00	5.50	12.00	15.40	18.22	26.17	28.17	30.00
	SD	NA	2.12	NA	9.50	3.93	4.40	2.71	3.16
非漢字圏受験者	M	3.19	6.29	7.93	11.73	15.08	15.33	20.00	21.00
	SD	5.14	5.21	4.22	5.09	3.26	2.08	6.98	6.63
全 体	M	5.02	10.07	14.16	17.31	19.62	25.13	26.53	26.27
	SD	6.17	7.68	6.58	6.94	5.48	4.48	4.9	5.97

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

表11 2011_R1 Jレベル別 漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の読解の平均点

		J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8
漢字圏受験者	M	8.50	13.14	17.25	21.94	20.58	23.22	28.90	32.20
	SD	8.96	6.36	5.47	5.33	4.50	5.76	2.47	1.79
	N	4	7	20	32	36	18	10	5
準漢字圏受験者	M		12.60	13.71	24.25	18.40	21.00	28.00	32.00
	SD		2.97	5.19	2.50	5.41	NA	1.90	1.41
	N		5	7	4	5	1	6	2
非漢字圏受験者	M	0.86	8.30	8.68	9.44	15.16	22.33	21.00	19.00
	SD	1.07	4.88	4.53	2.96	5.94	0.58	2.83	NA
	N	7	10	19	9	19	3	2	1
全 体	M	3.64	10.82	13.17	19.64	18.68	23.00	27.72	30.50
	SD	6.30	5.39	6.35	7.00	5.56	5.21	3.30	4.87
	N	11	22	46	45	60	22	18	8

注：M は平均、SD は標準偏差、(NA) は該当者が1名

5. 科目間相関と重回帰分析

5.1. 相関分析

各科目の相互関係を検討する。全受験者の科目間の相関係数は以下の表のようになる（表12～表23）。全受験者の科目間相関は、2010_R3と2011_R1の間では全ての項目間で有意な水準で相関が見られた。相関係数としては、2011_R1の文法と漢字が $r=.385$ 、聴解と漢字が $r=.444$ であり、2010_R3より弱い相関となっているが、その他の全項目で強い相関が見られた。

表12 2010_R3 全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.715**			
読 解	.742**	.719**		
漢 字	.831**	.781**	.847**	

表13 2011_R1 全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.655**			
読 解	.643**	.692**		
漢 字	.385**	.444**	.656**	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

次に、漢字圏、準漢字圏、非漢字圏の分類による各科目の相関を分析した。その結果を表にまとめた(表14～表19)。漢字圏は2010_R3においても2011_R1においても全項目間で有意な相関が見られた。しかし、2011_R1では文法と漢字の相関が $r=.293$ と弱く、聴解と漢字も $r=.323$ と弱い結果となっている。非漢字圏においても2010_R3、2011_R1とも全ての項目で有意な相関が見られている。

一方、準漢字圏は2011_R1においては漢字と他の項目の間に有意な相関が見られなかった。2010_R3では漢字と他の項目に非常に強い相関が見られており、大きく異なる結果となった。準漢字圏は漢字能力よりも文法能力で解決していた可能性がある。但し、漢字テスト受験者が少なく、他の文法テスト、聴解テスト、読解テストと比べると母集団が異なり、それが理由で検出されなかった可能性も考えられる。

有意差の見られた相関係数を見ると、漢字圏においても非漢字圏においても漢字と他の項目との相関が弱いようである。これに関しては、オンラインの漢字テストの信頼性に強い疑義があり、オンライン漢字テストと筆記による漢字テスト⁴⁾の得点が大きく乖離しているという現象が2010年のRound 3、2011年のRound 1、Round 2のクラス決定時に観察され、毎回、筆記テストよりも、オンラインでの漢字テストの得点が高いという結果となっている。そのため、2011年のRound 3ではオンラインによる漢字テストを廃止し、筆記による漢字テストのみを実施することとなった。このオンライン漢字テストと筆記テストの得点の乖離に関する分析は、別の報告に譲ることとし、本調査では文法・聴解・読解の3テストの得点分析に集中することにする。

表14 2010_R3 漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.533**			
読 解	.716**	.616**		
漢 字	.521**	.493**	.520**	

表15 2011_R1 漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.532**			
読 解	.568**	.645**		
漢 字	.293**	.323**	.437**	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

表16 2010_R3 準漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.799**			
読 解	.779**	.803**		
漢 字	.914**	.820**	.847**	

表17 2011_R1 準漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.792**			
読 解	.739**	.577**		
漢 字	.232**	.093	.076	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

表18 2010_R3 非漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.750**			
読 解	.732**	.705**		
漢 字	.688*	.761**	.801**	

表19 2011_R1 非漢字圏受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文 法				
聴 解	.740**			
読 解	.696**	.701**		
漢 字	.660**	.485*	.672**	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

次に、J1からJ4の全受験者の科目間の相関を見たところ（表20～表23）、2010_R3では全項目間に有意な相関が見られたが、2011_R1においては漢字と文法の間には有意な相関が見られなかった。しかし、他の項目は有意な相関が見られ、概ね、高い相関を示した点は、2010_R3と同様の結果となった。

しかし、J5からJ8の結果を見ると、2010_R3も2011_R1も、どちらも項目間の相関は高くはない。この段階では、言語知識以外の要素がプレースメントテストの理解に作用した可能性が考えられる。

表20 2010_R3 J1～J4全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文法				
聴解	.597**			
読解	.670**	.621**		
漢字	.744*	.731**	.846**	

表21 2011_R1 J1～J4全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文法				
聴解	.555**			
読解	.575**	.649**		
漢字	.208	.630**	.885**	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

表22 2010_R3 J5～J8全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文法				
聴解	.319**			
読解	.152	.480**		
漢字	.168	.438**	.496**	

表23 2011_R1 J5～J8全受験者の科目間相関

	文 法	聴 解	読 解	漢 字
文法				
聴解	.385**			
読解	.371**	.520**		
漢字	.203	.149	.471**	

注：* $p < .05$ 、** $p < .01$

5.2. 重回帰分析

Jレベル全体を予測するステップワイズ法による重回帰分析の結果、2010_R3は文法と聴解が説明変数となり、2011_R1では文法のみが説明変数となった。この結果から、文法がJレベルを予測する有効な説明変数となっているのは間違いない。

表24 Jレベル全体を予測する重回帰（2010_R3）

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2 = .744$			
		文法	0.863	***
ステップ 2	$R^2 = .774$			
		文法	0.645	***
		難解	0.278	***

除外された変数：読解、漢字
 $n = 307$.

表25 Jレベル全体を予測する重回帰（2011_R1）

ステップ	決定係数	調整済み	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2 = .509$	$R^2 = .503$			
			文法	0.713	***

除外された変数：聴解、読解、漢字
 $n = 235$.

J4以下を予測するのはどちらも文法だった（表26～表27）。文法（G1～G4）までの分類は非常に良く機能しているということが言える。

表26 J1～J4を予測する重回帰（2010_R3）

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2=.876$			
		文法	0.936	***

除外された変数：聴解、読解、漢字
 $n=187$.

表27 J1～J4を予測する重回帰（2011_R1）

ステップ	決定係数	調整済み	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2=.730$	$R^2=.718$			
			文法	0.854	***

除外された変数：聴解、読解、漢字
 $n=127$.

J5以上を予測する説明変数は2010_R3と2011_R1の間に差が見られた（表28～表29）。共通しているのは読解が有意な説明変数であるのに対し、2010_R3では聴解が、2011_R1では文法が説明変数として検出された。但し、どちらも決定係数⁵⁾が、2010_R3で $R^2=.302$ 、2011_R1で $R^2=.562$ と、さほど高くなく、各回によって変動の激しい可能性がある。今後の分析を連続的に観察する必要がある。

表28 J5～J8を予測する重回帰（2010_R3）

ステップ	決定係数	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2=.259$			
		聴解	0.509	***
ステップ 2	$R^2=.302$			
		聴解	0.341	***
		読解	0.276	***

除外された変数：聴解、漢字
 $n=119$.

表29 J5～J8を予測する重回帰（2011_R1）

ステップ	決定係数	調整済み	説明変数	β	p
ステップ 1	$R^2=.393$	$R^2=.383$			
			読解	0.627	***
ステップ 2	$R^2=.562$	$R^2=.548$			
			読解	0.483	***
			文法	0.436	***

除外された変数：聴解、漢字
 $n=108$.

6. レベル判定のための配点基準に関する議論

前節で分析したように、2010_R3においても2011_R1においても、J1からJ4までのレベル判定に文法テストは有効に機能している。これは文法テストが、G1からG4までのパートに分けられ、各15問で構成されており、J1からJ4の学習項目と平行させてあるためである。従って、J1からJ4までを有効に弁別できるのは当然の帰結であるとも言える。加えて、2010_R3と2011_R1の平均点の分析から見ても、J4とJ5、J5とJ6の間にも平均点の開きが見られ、文法テストの弁別力は小森（2011）では上級で弱いと予測されていたが、確かに予備テストにおいてはそのような傾向が観察されたが（表1参照）、2010_R3と2011_R1の本テストではJ5レベルまでは有効に弁別力が機能していることが観察された。J1の最高点と最低点の得点幅は12点（0～12点）、J2は11点（13～24点）、J3は11点（25～36点）、J4は7点（37～44点）、J5は3点（45～48点）となっており、この得点幅で現状では問題なく学生のレベル判定が達成されているようである。J6以上は文法テストを参照していないが、重回帰分析の結果ではJ5以上では2010_R3では文法との因果関係が見られず、2011_R1では文法との因果関係が見られたが（ $R^2=.562$ 、 $\beta=.436$ 、 $p<.001$ ）、やはり中上級での文法テストの弁別力は初級よりも弱いものとなっており、J6からJ8を文法テストで判別するのは現状のテスト内容では非常に困難である。

2010_R3では、重回帰分析の結果、聴解（ $R^2=.302$ 、 $\beta=.341$ 、 $p<.001$ ）と読解（ $R^2=.302$ 、 $\beta=.276$ 、 $p<.001$ ）がレベル判定に有意な因果関係を結んでいたが、2011_R1では文法（ $R^2=.562$ 、 $\beta=.436$ 、 $p<.001$ ）と読解（ $R^2=.562$ 、 $\beta=.483$ 、 $p<.001$ ）が有意な因果関係を結んでいた。この結果から、中上級レベルでは読解が大きく弁別に作用しており、やはり中上級のレベル判定のためには読解テストの参照が必要であると考えられる。特に平均点で見ると限りにおいては、J7とJ8の弁別に読解が大きく寄与していた。しかし、読解というものは言語力を超えた、知識や論理的思考力に大きく影響を受け、必ずしも日本語力によるレベル判定にならない場合がある。そのため、中上級の判定には聴解テストと読解テストを併せた判定が不可欠である。

聴解は2011_R1ではレベル判定に有意な因果関係が見られなかったが、やはり、J5とJ6の間と、J7とJ8の間に得点差が見られ、中上級レベルの判定には読解に加えて、聴解も参照する必要がある。

しかしながら、読解と聴解のテストは当初から上級レベルの判定のために作成されており、初中級に合わせた読解や聴解の問題も含まれてはいるが、読解テストは日本語能力試験の1級と2級の問題から選別されており、そのため、JLCsのコースに準拠した文法テストとは構成が異なっているのではないかとこの相違点もある。また聴解テストは18問構成であるが、後半の3問に至っては1級レベルを大きく超える内容の聴解力が必要とされ、J6とJ7、J7とJ8の弁別には役に立っているが、果たして全受験者にそのような難易度の高い問題を解かせるべきかどうかという試験構成上の問題も指摘される。

聴解テストによるレベル判定のための配点基準は、J6で10点以上、J7で12点以上、J8で14点以上という配点で足切りをしているが、後半の聴解試験の問題の難解さから考えると、各マイナス1点に判定基準を下げた方が良いかもしれない。つまり、本来は1つ上のレベルにプレースされる日本語力（文法力と読解力）があるにも関わらず、難解な聴解テストによって1つ下のレベルにプレースされて

いる可能性があるからである。聴解の平均点が2010_R3のJ6で12.45、2011_R1のJ6で11.82であり、同様に2010_R3のJ7で13.44、2011_R1のJ7で13.89であるのを見ると、現状のレベル判定の足切り点の設定は妥当のように見えるが、実際には、聴解テストと他のテストとの難易度にはかなりの差があり、聴解テストでこのレベルの点数を取れる学生は相当に日本語力が高いと言え、逆に見ると、文法テストでJ6以上に判定された学生が、難易度の高い聴解テストで点数を取れなかったために、下のクラスへプレースされるということが起こりうるのである。

7. 今後の課題

本報告は小森（2011）の追調査という形式で、データを対比させながら論じてきた。この主目的はオンラインテストが本番としてはまだ3回（R1とR3を本実施と考えれば2回）しか実施されていないという現状を踏まえて、記述的なデータの蓄積が必要であると考えたからである。実際の細部の議論はまだこれからというのが実情であり、現段階においては、各回の平均点の推移と、全体のレベルを決定した要因の分析が中心とならざるを得ないのである。5章の中でも言及したが、オンラインによる漢字のテストは各問ごとの時間制限が設けられているものの、文法、読解、聴解のテストとは異なり、電子辞書を使用したカンニングが可能であり、オンラインの漢字テストによるKコース判定と筆記による漢字テストの点数が著しく乖離していたため、オンラインによる漢字テストの継続を断念せざるを得なくなった。このような形で、オンラインによるプレースメントテストはまだ試行錯誤の段階である。しかしながら、文法テストによるJコースの判定は十二分に機能しており、中上級の読解テストと聴解テストによる判別も機能している。これらを拡大発展させるためにも、各回のデータの蓄積は重要であり、今後も継続して報告をし、議論を続けて行きたい。

参考文献

- 大神智春・郭俊海（2010）.「留学生のための日本語コース（JLC）における受講・管理オンラインシステムの開発・導入とその実践」『九州大学留学生センター紀要』18、69-74.
- 大神智春（2011）.「九州大学留学生のための日本語コース（JLCs）」『九州大学留学生センター』19、57-69.
- 加納千恵子（2000）.「中級学習者による漢字熟語の習得上の困難点 — 韓国人学習者の場合 — 」『日本語教育方法研究会誌』7（2）、2-5.
- 小森和子（2011）.「プレースメントテストのオンライン化の試みと問題項目の分析評価」『九州大学留学生センター紀要』19、89-106.

注

- 1) 九州大学留学生センターでは、1年を大きく2つの学期に分け、その2つの学期を更に2つのラウンド（Round）に分け、前期（Round 1、Round 2）、後期（Round 3、Round 4）のように構成している。

- 2) 総合コース (Integrated Courses) として入門から上級まで J1から J8までの8レベルが設定されている。この他に、漢字コース (Kanji Courses) が K2から K8、会話コース (Speaking Courses) が S2から S8、読解コース (Reading Courses) が R6と R7、作文コース (Writing Courses) が W7と W8、専門講義 (Special Purpose Japanese) が T8のように用意されている。
- 3) Round 1および Round 3は前期と後期の開始の学期であり、新規の入学者を対象にしている。一方、Round 2と Round 4は中途入学者や上級へのスキップを目的とした学生が主な対象となっている。そのため、若干配点を高めに設定してある。
- 4) 2010年の Round 3に初回のオンラインによる漢字テストが実施され、この成績を基に K (漢字) コースがプレースされたが、その結果、筆記力の著しく落ちる学生が中上級の K (漢字) クラスにプレースされるということが発生した。そのため、2011年の Round 1と Round 2では、K コース、R (読解) コース、W (作文) コース、T (専門) コースの受講を希望する学生に対してのみ、別途、日を設けて、筆記による漢字テストを行うことにし、漢字筆記テストの結果と漢字オンラインテストの結果を照合するという作業を行った。
- 5) 得点を説明する % であり、1.00の場合、この得点 (独立変数) の100%をこの説明変数 (従属変数) で説明できるということになる。

吉川裕子*

*九州大学留学生センター准教授

② 後期

開講式	10月8日
伊都キャンパス見学	10月15日
授業開始	10月19日
健康管理についての講義（健康科学センター：上園慶子教授）	10月22日
見学旅行（熊本城、阿蘇山）	11月22日
三者面談（指導教員・留学生・コーディネーターの三者）	11月－12月
冬休み	12月20日－1月7日
書道の授業（学外講師）	1月19日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	1月31日
冬季ラウンド（J2、J3、中級入門レベル）	2月7日－25日
発表会（文集『世界の輪43号』に収録）	3月3日
授業終了	3月4日
閉講式	3月10日

3) 研修生

研修生は、国費外国人留学生のうち九州大学及び北部九州の大学に配属された研究留学生と、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期）である³。本年度は、自国で日本語を勉強してきた既習者（J2～J4レベル）が7名いた。既習者はJLCでレベルの相当する3種類のクラスを受講した。

① 前期 13名（日本語既習者5名を含む）

出身：アルゼンチン、イギリス（2名）、イラン、インドネシア、オーストラリア、ガーナ、カンボジア、バルバドス、ペルー、ベルギー、マレーシア、ラオス
進学先：九州大学12名、北九州市立大学1名

② 後期 10名（日本語既習者2名を含む）

出身：アルジェリア、インドネシア（2名）、ウズベキスタン、エジプト、キプロス、シリア、ミャンマー（2名）、ラオス
進学先：九州大学5名、九州工業大学1名、福岡教育大学4名

4) 時間割

① 前期

〈4月8日～7月9日〉第1ラウンド・第2ラウンド (JLC と同じ日程)

限	時 間	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J1c		J1c	J1c
3	13:00-14:30	文化	K1	文化	K1
4	14:50-16:20	S1	文化	S1	文化
5	16:40-18:10			補習	

J1c は JLC のクラスである。「S1」(会話入門)、「K1」(漢字入門)、「文化」の3種類のクラスは、研修生だけを対象として独自に運営している。「補習」は、希望者を対象に自由に質問のできる時間として1コマ実施した⁴。第1・第2ラウンドの授業は6名の教師で担当した。

〈7月12日～8月6日〉夏季ラウンド

限	時 間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	J2	発表会準備	J2	発表会準備	J2
4	14:50-16:20	J2	発表会準備	J2	発表会準備	J2

JLC の第2ラウンド終了後に夏季ラウンドを立ち上げ、J1を終了した研修生を対象として、J2レベルのクラスを実施した。JLC の J2 の授業は12週間 (36コマ)、一方夏季ラウンドは4週間 (44コマ) で J2レベルを終了する。夏季ラウンドの方がコマ数が多いが、短期間での詰め込み授業である。夏季ラウンドは9名の教師が担当した。

② 後期

〈10月19日～2月4日〉第3ラウンド・第4ラウンド (JLC と同じ日程)

限	時 間	火	水	木	金
2	10:30-12:00	研修 J1		研修 J1	研修 J1
3	13:00-14:30	文化	K1	文化	K1
4	14:50-16:20	S1	文化	S1	文化

後期は JLC の日程に変更があり、授業が1週間遅く10月19日に開始された (平成21年度後期日は10月13日開始)。1週間遅れると、研修コースの全日程を消化できなくなるため、J1クラスは研修コース独自の進度に変更した。ただし、教科書・教材は JLC と同じものを引き続き使用した。第3・第4ラウンドは5名の教師が担当した。

〈2月7日～2月25日〉冬季ラウンド

限	曜 日	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00	J2	J2	J2	J2	J2
3	13:00-14:30	J2	発表会準備	J2	発表会準備	J2
4	14:50-16:20	J2	発表会準備	J2	発表会準備	J2

JLCの第3ラウンド終了後に冬季ラウンドを立ち上げ、J2レベルの終了を目指したクラスを3週間実施した。冬季ラウンドの授業は6名の教師で担当した。

3. 授業内容

1) 授業時間数

① 前期

(1コマは90分)

レベル	期 間	週のコマ数	週	時間小計	時間合計
初心者	ラウンド1 & 2	12	12	216.0	328.5
	夏季ラウンド	15	4	90.0	
	発表会の週	15	1	22.5	
既習者	ラウンド1 & 2	7	12	126.0	163.5
	夏季ラウンド	4	4	24.0	
	発表会の週	9	1	13.5	

初心者とは、研修コース開講時に日本語学習歴のない者を指す。

② 後期

レベル	期 間	週のコマ数	週	時間小計	時間合計
初心者	ラウンド3 & 4	11	12	198.0	283.5
	冬季ラウンド	15	3	67.5	
	発表会の週	12	1	18.0	
既習者	ラウンド3 & 4	7	12	126.0	157.5
	冬季ラウンド	4	3	18.0	
	発表会の週	9	1	13.5	

21年度後期は、冬季ラウンドの既習者クラスを実施したが、22年度は既習者間のレベルに差があり、クラスを設置できなかった。しかし、22年度は、夏季ラウンド・冬季ラウンドともに、既習者対象の最終発表の準備クラスを設け、担当の教師が個別指導に当たった。

2) 使用教材

使用した教材の主なものは以下の通りである。

J1：『初級日本語げんきⅠ』、	坂野永理他	The Japan Times
『初級日本語げんき ワークブックⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
S1：『初級日本語げんきⅠ』	坂野永理他	The Japan Times
プリント教材		
K1：『初級日本語げんきⅠ 読み書き編』	坂野永理他	The Japan Times
プリント教材		
文化：自主作成教材		
J2：『初級日本語げんきⅠ』、『初級日本語げんきⅡ』		
『初級日本語げんき ワークブックⅠ』、『初級日本語げんき ワークブックⅡ』	坂野永理他	The Japan Times

3) 授業内容

初心者レベルのクラスの授業内容は下記の通りである。

- J1：1回90分の授業を週3回行う。日本語学習経験の無い学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す⁵。テキストの1課から8課を扱う。
- S1：J1のクラスと連携させながら、テキストの会話部分を補足発展させて、十分に会話の練習をする。
- K1：ひらがな・カタカナの表記から始まり、3週目から漢字の学習を開始する。J1クラスの進捗の後を追う形で進める。総学習漢字数約100字。
- 文化：教室での活動の他に見学・訪問などを実施しつつ、①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶことを目標とする。研修コース終了前の発表会の準備も含む。
- J2：対象は動詞、形容詞の過去、非過去の活用がわかる人。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する⁶。テキストの9課から15課を扱う。

4. 成績の認定と報告

成績は各クラスの得点を総合して判定した。(既習者の成績はJLCの各受講クラスの成績の総合点)前期・後期それぞれ下記の通り全員合格であった。センター委員会の承認を得て修了が認定された。

総合評価	A	B	C	D	不合格
数値 (%)	90 ~ 100	80 ~ 89	70 ~ 79	60 ~ 69	60未満
前期 (人)	7	5	1	0	0
後期 (人)	4	3	3	0	0

5. 研修生からの評価

コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施した。以下に評価の結果をまとめる。記述部分には、コースや教師への感謝をはじめ肯定的な意見が多数あるが、今後のコース運営を考えさせるコメントを抜粋し、筆者が訳して記す。

1) 研修生による評価

① 前期 9月3日実施 回答：12（初心者7名・既修者5名）

質問1 日本語のクラスに関して（質問1～5：初心者の回答）

〈初心者 クラス〉（数字は人数）

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	5	2	0	0	0	0
S1	6	1	0	0	0	0
K1	6	1	0	0	0	0
文化	5	2	0	0	0	0

- J1のペースがちょっと遅い。
- J1が非常にゆっくりだ。一方、夏季ラウンドのJ2は速すぎる。
- S1はJ1で習ったことを補強していてよい。
- もっと漢字を勉強したい。（2名）
- 文化で、伝統的な日本文化・歴史・芸術の話題があるといい。

〈J2 クラス〉（夏季ラウンド）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
3	3	1	0	0	0

- クラスのペースが速い。（4名）
- 第9課はJ1クラス期間に勉強できるといい。
- 文法を応用練習する時間が足りない。（2名）

〈クラス間のバランス〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
3	4	0	0	0	0

- 文化クラスが他のクラスの間に交ざっているのはいい方法だ。文化クラスでリラックスできて、ストレス解消ができる。
- S1の時間を増やした方がいい。

質問2 もっと勉強したかったこと（複数回答可）

会話	文法	漢字	聴解	発音	読解
3	5	3	2	1	3
作文	文化	スピーチ	語彙	その他	
1	1	4	4	1	

その他：歴史や芸術に関する情報

質問3 学習者自身が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
0	5	2	0	0	0

質問4 毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	0	平均2時間
3時間以上	2	
2時間以上	3	
1時間以上	2	

質問5 コースへの満足度

100%	0	平均89%
90%以上	5	
80%以上	2	
70%以上	0	

質問6 授業以外の活動について（既習者の回答を含む）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
熊本城・阿蘇山旅行	7	4	0	0	0	0
太宰府見学	7	2	0	0	0	0
書道	4	3	0	0	0	0
小学校訪問	8	4	0	0	0	0

既習者は自由参加となっているため合計人数が異なる。

質問7「三者面談」について（既習者の回答を含む）

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
3	4	0	1	0	4

役に立たない1：指導教員には既に何度も会っている。 無回答：三者面談なし。

質問8「発表会」について（既習者の回答を含む）

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
4	7	0	1	0	0

発表会に関しては、コメントを全て記述する。

- ・日本語の練習の機会となった。（2名）
- ・自分の専門について日本語で話す方法を学んだ。（3名）
- ・研究で使う専門語彙の学習ができた。（2名）
- ・クラスメートの専門分野についても聞く（学ぶ）ことができてよかった。（3名）
- ・日本語の使用に自信が持てるようになった。
- ・日本語による発表の方法と質疑応答の方法を練習することができた。（既習者）
- ・発表会の時期はコースの終わりではなく、他の時期にできないか。8月の終わりは皆引越して忙しい。（2名）（既習者）
- ・発表は楽しんだが、準備の授業が多すぎた。（既習者 「役に立たない」の回答者）

質問9 コースへの提案

- ・J2終了直後に発表会があれば、長い夏休みで日本語を忘れることもなく、最高の状態で発表ができると思う。
- ・既習の研修生にも、もっと多くの日本語クラスが必要だ（3名）。研修コースは大学院に進学する学生が、半年間集中的に日本語を勉強するコースで、日本語以外の授業がないのだから、初心者と同じ週10コマぐらい日本語を受講したい。

質問10 会話パートナー⁷に関して（既習者のみ）

- ・大変役に立った。おかげで私の日本語会話力は進歩した。
- ・よかった。友だちになって、まだ会っている。
- ・会話パートナーと出会えてとてもよかった。できればコースの初めに紹介してほしい。

② 後期 3月4日実施 回答：9（初心者7名、既習者2名）

質問1 日本語のクラスに関して（質問1～5：初心者の回答）

〈初心者クラス〉（数字は人数）

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	7	0	0	0	0	0
S1	7	0	0	0	0	0
K1	5	2	0	0	0	0
文化	6	1	0	0	0	0

〈J2クラス〉（冬季ラウンド）

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
6	1	0	0	0	0

- ・大変よかったが、期間が短かった。
- ・非常によく計画されていた。スケジュールは完璧だ。
- ・ペースは大変よかった。

〈クラス間のバランス〉

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
4	3	0	0	0	0

- ・クラス間のバランスはとてもいい。（3名）
- ・もっと会話のクラスがあるといい。
- ・1週間にもう1回漢字のクラスがあるといい。

質問2 もっと勉強したかったこと（複数回答可）

文法	会話	聴解	スピーチ	漢字	語彙
5	5	4	3	3	2
発音	文化	読解	作文	その他	
1	3	2	1	0	

質問3 学習者自身が日本語の学習に意欲的に取り組んだかどうか

大変意欲的	意欲的	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
1	5	1	0	0	0

質問4 毎日何時間ぐらい自宅学習に取り組んだか

4時間以上	0	平均2.6時間
3時間以上	3	
2時間以上	4	
1時間以上	0	
無回答	0	

質問5 コースへの満足度

100%	2	平均91.6%
90%以上	2	
80%以上	3	
70%以上	0	

質問6 授業以外の活動について（既習者の回答を含む）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
熊本・阿蘇旅行	6	3	0	0	0	0
太宰府見学	9	0	0	0	0	0
書道	4	2	1	0	0	0
小学校訪問	9	0	0	0	0	0

既習者は自由参加となっているため合計人数が異なる。

質問7 「三者面談」について（既習者の回答を含む）

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
3	2	0	0	0	4

無回答：三者面談なし

質問8 「発表会」について（既習者の回答を含む）

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
7	2	0	0	0	0

発表会に関しては、コメントを全て記述する。

- ・重要な専門語彙を学ぶことができた。（2名）
- ・専門の研究に入るために進歩が必要な部分や自分の弱点を確認するのに役立った。
- ・たくさんの経験ができたので、発表は有意義だ。
- ・日本語による本物の発表の経験となった。

- ・日本語で話すことに勇気づけられた。
- ・専門の研究を始める前に、日本語で発表ができたことは、将来の発表に役立つ。
- ・研究室では、多くの学生が日本語で発表するので、専門の研究に役立つ。
- ・発表の準備を通して、辞書には出ていない日本語のニュアンスに対する見識を得た。
さらに、書く作業を通して、より詳細な文法を学ぶことができた。(既習者)

質問9 コースへの提案

- ・今のままで変える必要はない。
- ・もっと漢字クラスの時間があるといい。
- ・会話と聴解をもう少し多く。
- ・祭りの見学等、授業外活動と見学を増やす。
- ・最終発表の準備の時間をもっと長く。
- ・既習者も文化クラスで勉強できるといい。(既習者)

質問10 会話パートナーに関して(既習者のみ)

- ・とても役立った。このシステムに感謝している。
- ・会話パートナーとの時間は楽しかったし、日本語や日本文化に関する質問にも答えてもらえて、大変役に立った。毎週日本語の練習ができるのが楽しみだった。

2) 評価に基づいたまとめ

研修コースの6か月間の構成と運営に関しては、概ね高い評価を得ていると言うことができる。
その中で、今年度は下記の点が認められる。

〈J2レベルの進度に関して〉

平成20年度に研修コースとJLCをJ1クラスの部分で融合させる改編が行われ⁸、以来融合させた形で運営してきたが、2－4)で見たように、平成22年度後期にJLCの授業開始が1週間遅くなったことから、後期はJ1・J2クラスを研修コース独自の進度で運営した。下記の表のように、前期はJ2レベル7課分を夏季ラウンドの4週間で入れていたが、後期はラウンド4で11課まで進み、冬季ラウンドで扱う課を軽減できた。

22年度前期	ラウンド1・2	夏季ラウンド 4週間
	1課－8課	9課－15課
22年度後期	ラウンド3・4	冬季ラウンド 3週間
	1課－11課	12課－15課

(JLCでは、J1は1課から8課、J2は9課から15課となっている。)

今後、JLC の授業開始が前期・後期ともに22年度後期と同様になり、前記のような進度が継続できれば、研修コース期間にJ2レベル終了までを無理なく実施可能である。

下記の表は、22年度の夏季ラウンドと冬季ラウンドの評価を比較したものである。

	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
夏季ラウンド	3	3	1	0	0	0
冬季ラウンド	6	1	0	0	0	0

夏季ラウンドに比べ冬季ラウンドでは「大変よい」の割合が多い。コメントを見ると、夏季ラウンドでは、「ペースが速い」「時間が足りない」という声が出ていたが、冬季ラウンドは「ペースはよい」になっている。これは、研修コース独自の進度で運営できるようになったことが大きい理由だと言える。

〈発表会に関して〉

研修生のコメントに基づき発表会の評価を検討した結果、研修生にとって日本語による発表は、留学の目的である専門分野の研究に直結するプログラムとして有用だと思われることが分かった。その理由として、「専門語彙の習得」「日本語力の向上」「日本語による発表の経験」「専門に関して発表する方法の習得」「話すことへの自信」「将来の研究で役立つ」「他の学生の発表からの学び」などの記述が見られる。一方で、発表会の時期に関しては、発表会の準備の時期が引越して忙しい時期と重なっていることを指摘する声が出ている。また、前期は授業終了と発表会の間に夏休みが入るため、夏休み明けではなく、授業終了直後に実施することを提案する意見もある。

〈既習者の要望〉

既習者の授業コマ数は1週間に7コマで、初心者クラスの11コマに比べて少なく、期間も短い。既習者からは、クラス数が少ないことに関して、「研修コースは大学院に進学する学生が、半年間集中的に日本語を勉強するコースで、日本語以外の授業がないのだから、初心者と同じ週10コマぐらい日本語を受講したい」等と、受講クラスの増加を望む声が複数出ている。

21年度後期は、冬季ラウンドで既習者クラスを実施したが、22年度は既習者間のレベルに差があり、既習者クラスを設置できなかった。既習者の授業時間数が少ないことへの対応として、22年度前期に「会話パートナー」制度を導入した。希望者は、留学生課から紹介された日本人九大生と定期的に会って、日本語の会話の練習ができる。この制度は、利用した研修生の全員が歓迎している。

6. 今後の課題

研修コースは、日本語を学習した経験のない研修生に初級レベル（J2終了程度）の日本語を習得させることを目標としてきたが、最近では、ある程度自国で日本語の勉強をしてから来日する研修生が増加しており、今後はこうした既習者への対応も考えなければならない。今年度取り入れた会話パート

ナー制度は好評だったので、今後も毎学期実施し、さらにコース開始後の早い時期からの実施を検討する。しかし、既習者から出ている受講クラス増加の要望は、引き続き検討課題に留まっている。

注

- 1 三者面談に関しては、「日本語研修コースにおける「三者面談」の実施と効果」『九州大学留学生センター紀要』第16号 pp.13-21参照。
- 2 発表会は毎学期末に行う口頭発表である。各自の専門に関して、今まで研究してきたことまたは今後研究したいことについて、専門外の人に日本語で分かりやすく説明する。一人質疑応答を含めて15～20分。指導教員他関係者を招待して行う。発表の原稿は文集『世界の輪』としてまとめる。発表会の準備の手順に関しては、「日本語研修コースにおける「文化」クラスの試み」『九州大学留学生センター紀要』第20号掲載予定。
- 3 国費留学生の人数が10人以下と少ない場合は、学内募集を行い、日本語の学習経験のない該当者を受け入れている。22年度は後期に1名、学部所属の研究生を受け入れた。また、他のコースから該当者を受け入れる場合もあり、22年度前期は、アジア人財資金構想プログラムから1名、広州市との交換プログラムから1名受け入れた。
- 4 補習クラスは、担当者の報告によると、遅れている研修生の希望を聞いて支援し、余裕のある研修生を伸ばすクラスとして、効果的だった。初心者全員が1回以上出席している。定期的に参加した3名のうち2名は主に文法と会話の復習の時間として利用し、1名は漢字の学習をした。
- 5 留学生センターホームページ <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/home.htm> のJLC 参照。
- 6 留学生センターホームページ <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/home.htm> のJLC 参照。
- 7 会話パートナー制度は、既習者の授業時間数が少ないことへの対応として、22年度前期に開始した。留学生課が、日本語会話練習の相手をしてくれる日本人九大学生を募集し、適当な学生を紹介する。既習者を対象としている。研修生・日本人学生は双方の空き時間に定期的に会い、日本語で話す。日本人学生は、毎月簡単な報告を留学生課に提出する。
- 8 改編に関しては、「日本語研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第18号 pp.79-90参照。

JTWプログラム2010-2012

今 井 亮 一*

目 次

1. 本稿の目的
2. JTWの概要
3. 他のプログラムとの関係
4. 実施組織
5. 学事暦
6. プログラム内容
7. 評価
8. 各学部、学府、研究院との協力関係
9. 教室環境
10. 最近のISP改革
11. 国際化戦略とJTW

1. 本稿の目的

以下では、最近のJTWプログラムの実施状況を報告し現状の問題点と解決方向を検討する。本稿は、現在のJTWプログラムの実施状況から大きく乖離した内容を一切含んでいないが、あくまで筆者の個人的見解である。JTWは10月に開講し、翌年の7月末に修了するので、本稿では2011年10月に始まった現在進行中のJTWについて主として説明する。

2. JTWの概要

JTWは1994年に第1期生を受け入れて以来、今日まで毎年、1年間（10月～翌7月）、短期留学生を受け入れ、英語による講義、演習、個人指導、見学などを提供している。1学期のみの参加も可能であり、毎年3月末には10数名の入れ替えがある。

2011年10月には第18期生を受け入れた。プログラム開始当初、受入人数は20名程度であったが、九州大学と学生交換協定を結ぶ海外の大学数の増加とともに規模を拡大し、現在では、年間、延べ60名程度の学生を受け入れている。2011年11月現在、53名の留学生在籍している。これは過去最大の規模である。

今年は東日本大震災（3月）のため、キャンセルや応募者の減少が懸念された。実際、4月から始

*九州大学留学生センター准教授。JTWプログラムコーディネーター。過去のJTWの実施状況については、九州大学留学生センター紀要（14号（2006年）～）に各年の報告がある。<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/fiscannual.html>

まった春学期（4月から7月まで）については、当初、数名のキャンセルが出た。しかし、10月から始まった第18期については、世界各地から多数の応募があり、キャンセルも少なく、結果的に過去最大規模となった。

3. 他のプログラムとの関係

留学生センターでは、海外から留学生を受け入れる短期留学プログラムとして「J L C C」「J T W」「A T W」の3つを実施している。J L C Cは、すでに相当程度、日本語力を習得した留学生を1年間（10月～翌7月）受け入れ、日本語による講義や演習を提供するものである。J T WとA T Wは、日本語力を前提とせずに留学生を受け入れ、英語による講義や演習を提供するものである。J T W（Japan in Today's World）はJ L C Cと同様、1年間（10月～翌7月）のプログラムである。A T Wは6月末～8月末に実施される。筆者は現在、Jordan Pollack 教授とともに、J T Wのコーディネーターを勤めている。

4. 実施組織

J T Wプログラムは、九州大学が責任をもって提供している。「留学生センター委員会」が教務上の意思決定機関である。その下に、実施の詳細を審議する「短期留学専門委員会」が置かれている。指導の実務は、留学生センターの「短期留学部門」に在籍する教授1名、准教授1名が、「J T Wコーディネーター」として担当している。事務上の支援は、国際交流部が行っている。

5. 学事歴

J T Wは10月初日に開講し、翌年2月末日に第1学期（秋学期）を終了する。3月は春休みであり、4月に第2学期（春学期）を開講し、7月末日に終了し、課程修了を認定する。各学期、4回程度のField Study という名称の研修小旅行（日帰りまたは1泊）がある。各学期末に、定期試験およびI S P 報告会が行われる。

6. プログラム内容

J T Wは以下のような個別要素から構成されている。各項目の詳細については、J T Wプログラムのホームページ²を参照して欲しい。

1. 講義（授業科目）
2. 独立研究 Independent Study Program (ISP)
3. Advanced Research Laboratory (ALR)
4. 日本語科目

5. Field Study
6. Tutorship
7. Host Family Program

以下、それぞれについて順に説明する。

6.1 授業科目

各学期、8から12の英語による科目が開講されている。これは、広範な分野（歴史、政治、経済、社会、文化、科学技術等）における、日本についての基礎的な知識を留学生に与えることを目的としている。最近の科目一覧は表1を参照されたい。担当者の所属は、人文系科目については留学生センターおよび学外が多く、社会科学系科目についてはもっぱら、留学生センター、法学部、経済学部である。

J T W学生は各学期、6科目以上を登録・履修しなければならない。ただし、ISPをとる学生は1科目、ALRをとる学生は2科目、それぞれ科目履修に代えることができる（後述）。

J T Wの特色は、すべての科目を、英語を使用言語として提供することにある。講師は、英語で講義し、（基本的に）英語の教材を用い、成績評価を英語で書かれた試験、レポート等に基づいて行う。学生の質問や討論もすべて英語で行われる。科目は、留学生センター専任教員のみならず、学内外の各分野の専門家が担当する。すべての科目は、全学に開放され、留学生のみならず、日本人学生も履修することができる。

授業の形式は、講義を中心としつつ、学生の積極的参加を意図してセミナー形式を部分的に取り入れている。以前（第11期まで）は、形式上、科目は講義（core course）とセミナー（advanced seminar）に分けられていたが、現在、この区別は撤廃されている。

6.2 Independent Study Program (ISP)

J T W学生は、各学期、1科目の履修をISPに代えることができる。ISPは、講義、セミナーと並び、当プログラムの重要な構成要素である。学内外の教員が指導教員となり、各学生が自主的に作成した研究計画に基づき研究を行う。目的は、日本社会に関する自発的な問題意識の育成にあり、テーマは、人文社会系の分野から選ばれることが多いが、理系の学生は、日本の先端科学技術に関する文献的研究を選択することもできる。研究成果は、所定の様式に

表1：最近の開講科目（担当者所属）

人文科学

Adjusting to Japan
Akira Kurosawa's Japan
Contemporary Japan and Popular Culture
Cultural Evolution of Japan
Enculturation and Education in Japan
Gender in Contemporary Issue
Japanese Cultural Patterns
Japanese Humor
Japanese Life through Tea Ceremony
Linguistic Description of Japanese
Miyazaki Hayao's World
Modern History of Japan
Traditional/Contemporary Performance Art
Two Murakami in Today's Japan

社会科学

Introduction to Japanese Economy
Introduction to International Finance
Global Financial Crisis
Japan-East Asian Relations
Japan's Labor Market
Japanese Politics Today
Local Production in Kyushu
Representations of Crime and Justice in Japan

基づき論文および口頭発表の形で全学に公開される。最近の ISP テーマ例を表 2 に掲載した。

6.3 Advanced Research Laboratory (ALR)

JTW では、理科系学生のために、九州大学の理工系学部の研究室に所属し研究する機会を提供している。JTW 学生は、各学期 2 科目の履修を ALR に代えることができる。具体的には、ALR を履修すると、週 2 コマの演習を履修したことになり、合わせて 2 単位を取得できる。実際には、ALR を履修する学生は、研究室に机と椅子を与えられ、日本人学生と同様に、ほぼ毎日、終日研究に専念している。

6.4 日本語科目（選択）

JTW 学生は、自らの水準に対応した、言語教育としての日本語科目を履修し、日本語力を高めることができる。日本語科目は、留学生センターの日本語部門によって提供されているので、ここでは詳細な説明は行わない。

6.5 Field Study（選択）

JTW では、留学生に日本社会の「現場」を体験してもらうために、見学旅行を実施している。訪問先は、史跡、学校、工場に始まり、田植／稲刈り、有田焼、座禅、茶の湯の体験にまで及ぶ。最近の実施例を表 3 に掲載してある。例年、学生からの評判に基づき、内容と時期の見直しを行っている。

このうち、開講時（10月）のオリエンテーションでは、「異文化理解セミナー」を行い、慣れない外国での学生生活への円滑な導入を図っている。また、秋学期終了時（2月ないし3月）の再オリエンテーションでは、学生から半年間の感想や注文を聞き、プログラムの改善に役立てている。これら二つのオリエンテーションは参加必須である。

6.6 Tutorship

JTW では、全学からチューターを募り、JTW 学生の修学・生活環境への適応を支援している。チューターとは別に、「日本語パートナー制度」があり、留学生には日本語力向上、日本人学生には外国語力向上の機会となっている。

表 2：最近の ISP テーマ例

Japanese monetary policy
An Exploration of the Ceramic Arts and History of Kyushu
The future of steel industry in Korea and Japan
Judicial Reforms in Japan and Eastern Asia
The development of relations between Japan and South Korea since 1945
Kanmin-Ittai: A study on the relationship between the government and the private sector in postwar Japan / Political Parties
Sexuality in Japan in Absence of a Judeo-Christian Framework
Japan: The Success Story of One of the World's Only Eco-cities / urban planning
The effects of Imperial expansion on Japan's frontiers
Job preference and Job searching of students
Atypical forms of employment in Japan
Contemporary architecture in Japan: Nexus World
Housing influenced by Weisenhofsiedlung
Interculturality and Economic Intelligence in Japan
Old people / Global warming

表3：Field Study 実施例

実施月	宿 泊	訪 問 先	内 容
10	2 泊	九重高原、阿蘇山、熊本など	オリエンテーション、異文化理解セミナー
10	1 泊	西有田	稲刈り、有田焼
11	日帰り	大宰府	相撲部屋見学、天満宮、歴史
12	日帰り	福岡市内小学校	小学生との交流、授業の見学
3	1 泊	別府	再オリエンテーション、温泉文化の理解
4	日帰り	梅林寺（久留米市）	座禅、仏教
5	日帰り	トヨタ九州	自動車工場見学
6	日帰り	博多座	歌舞伎鑑賞
6	1 泊	西有田	田植

6.7 Host Family Program

学生の希望に応じて、Host Family を斡旋し、週末や休暇期間中に日本人の家族と過ごす機会を提供している。

7. 各学部、学府、研究院との協力関係

J T Wの専任教員は2名（教授1、准教授1）しかおらず、当初から自立ではなく、全学の緊密な協力の下に運営されることになっている。具体的には、講義科目提供および Independent Study Program (ISP)、Advanced Research Laboratory (ALR) の指導の多くを、全学各部局の協力で実施している。協力関係のほとんどは、J T Wコーディネーターから担当教員への個人的依頼で実現しているが、部局の事情によって、研究院へ公式に依頼し、教員を紹介してもらうという形式を取っている。

8. 評 価

当プログラムでは、各学期末に学生に調査用紙を配布し、「授業評価」と「プログラム評価」を行っている。授業については、内容の適切さ、難易度、教員の英語力と準備程度、宿題・課題の量と質などが、プログラムについては、教室、環境、宿舎、研修旅行（Field Study）、ISP などが、それぞれ5段階で評価され、集計結果を「短期留学専門委員会」で議論し、次学期、次年度のプログラム改善に役立っている。集計結果を見る限り、J T Wはおおむね好評である。その証拠として、年々、J T Wに参加する留学生は増えており、当プログラム2人の専任教員というささやかな陣容で、留学生30万人計画を掲げる国策に大いに貢献していると自負している。

9. 教室環境

JTWは16年前の開始時点で20人を受け入れ、おおよそ30人程度の規模を想定して2人の専任教員が配当されていると考えられるが、その後の規模拡大にもかかわらず、教育設備の拡充は特に行われていない。特に、講義教室の狭さ、数の少なさが問題である。JTWでは常時8～12科目を開講しているが、60名近い在籍者が自由に選択する結果、多くの科目で教室が混雑し、授業環境が悪化している。

留学生センターの建物では、全学の留学生のために日本語科目が数多く開講されている。留学生増加という国策を忠実に遂行した結果、留学生センターの狭隘な建物の中で利用可能な教室は慢性的にフル稼働しており、JTWの講義科目配当の大きな制約となっている。

10. 最近のISP改革

規模の拡大はJTWが国際的に評価されている証拠ではあるが、同時に改善すべき課題の増加をも意味している。特に個人指導（ISP）は、諸外国の交換留学プログラムにはあまり見られないJTWの特徴であり、国際競争力の源泉となっていると同時に、常に解決すべき課題を抱えてきた。

そこで、2008年から2009年にかけてISPの実施形態について大きな改革が行われた。本節ではそれを説明しその効果について報告する。ISP履修についてはこれまで、おおよそ次のような規則改訂が行われてきた。

第1期～第10期まで、ISPは必修であったが、学生は履修期間について1学期（半年）または2学期（1年、通年）を選択することができた。

第11期から第14期までは、原則1年間のプロジェクトが必修となった。

第15期には、半年間のISPも可能となり、ほぼ第10期までの制度と同様になった。ただし、ISPを履修しない学期は、講義科目を一つ追加履修しなければならない。

第16期には、ISPは選択科目となり、ISPを履修しなくてもJTW修了は認定されるが、ISPを履修しない学期は、代わりに講義科目を一つ追加履修しなければならない。

JTWが、修了要件としてのISP履修義務を緩和し、原則としてISPを選択肢とした背景を説明しよう。

まず第1に、近年、年間のべ60名近い留学生が全世界から参加している。これは、開始当初に想定された30人前後の、ほぼ倍の規模である。規模の拡大にともない、JTWコーディネーターが指導教員を全学に依頼する業務負担や、多くの学生の自主研究を自ら指導する負担が過重になりつつあった。根本問題として、JTWプログラムには「定員がない」。いかなる教育課程でも、質の維持をはかるには適切な範囲への規模の抑制が必要である。人数は倍になっているにもかかわらず、JTWを担当する専任教員（コーディネーター）は2人のままである、

第2に、JTWは九州大学本部の業務であり、全学の教員はその実施に協力することが期待されている。しかし、期待通り協力することを担保する制度は整備されていない。例えば、ISPの指導は、全

学各部署の専任教員の国際化への熱意に支えられた、事実上ボランティアである。しかし、政府からの国立大学法人への改革要請の強化にともない、部局外のことには割ける時間は限られている。現在、留学生センター以外の教員はボランティアでISPの指導教員を引き受けており、ISPを指導したからといってそれぞれの部局の業務が軽減されるわけではない。

第3に、各部署の教員の英語力は、必ずしも留学生の期待に応えられるレベルではない。筆者は、各学生を指導教員に引き合わせる場合は、必ず教員の英語力を確認の上、指導を依頼している。特に文系の場合、研究者として一流であっても研究成果を英語で報告する必要がこれまでなかったような分野では、十分な英語力を有する教員を見つけるのが難しい。

第4に、規模拡大にともない、自主研究の意欲の十分でない学生が増加し、指導教員の大きな負担となる事態も散見されるようになってきた。J T Wは、各国の有力大学（パートナー校）との信頼関係に基づいて運営されており、パートナー校が自信を持って推薦してきた学生を優秀とみなして受け入れてきた。しかし、現実には、すべての学生が、それぞれ積極的な学問関心を有し、自主研究を始めるに十分な基礎知識を有しているわけではない。指導教員の下で勉強を始めてみたものの、途中で意欲を失うこともある。もちろん、これは学生一人の責任ではない。ただ、意欲を失って教員の研究室に足を運ばなくなった学生をなだめすかし、やる気のない学生に業を煮やした指導教員にJ T Wコーディネーターが平身低頭して、とりあえず単位だけ形式的に修得させるようなやり方は、あるべき大学教育とは言えないだろう。

最後に、J T Wが参加者の日本語力を前提としない以上、来日直後から自主研究を義務付けるより、各人の日本語習得状況に応じて、ISPの履修を選択肢として提供する方が、教育効果は高いと考えられる。実際、日本に関する様々なテーマについて、十分な英語文献が存在する場合はごく稀である。これは、まったく日本語初心者である留学生にとって、大きな物理的制約である。実際に研究を始めてみて、英語文献がほとんど存在しないことを知り、研究意欲を喪失する学生は少なくない。とりあえず来日から半年ぐらひは、日本の政治経済・文化社会についてJ T Wの講義を履修することを通じて自主的な問題意識を養うように促し、同時に日本語の勉強に力を注がせた上、2月ぐらひの時点であらためて自主研究するかどうか判断させてこそ、きめ細かい教育指導と言える。現在では、日本語力の低い学生や、学問的問題意識の低い学生には、秋学期はISPの履修を見送り、学期末にあらためて春学期の履修を検討することを選択肢として提案し、自主的に決めさせている。

以上のような反省点に立ち改革を行い、ISPを選択肢とした結果、今日では、ISPの実施におけるトラブルはほとんどなくなるとともに、各部署に過大な負担をかけることもなくなった。10月時点で、おおよそ4割の学生がISPを選択し、そのほとんどが4月に継続更新する。さらに、約2割の学生が4月から新たな1学期のISPを始める。これは、4月から新たに参加する10名前後の学生からだけではなく、2月の中間報告会での発表に触発され、自分も研究をやってみたいという学生がいるからである。

現在、ISP指導について、おおよそ全学から協力を得ている。第17期秋・春、第18期秋（2010年10月から今日まで）のISP・ALR指導教員の所属分布は、留学生センター9、人間環境学研究院8、法学研究院8、経済学研究院5、工学研究院4、医学、システム情報、人文学、比較文化研究院がそれ

ぞれ1、学外21となっている。もちろん、JTWは文系に重点を置いたプログラムであり、文系の研究院の協力の割合が高い。一方、2008年から教養課程が六本松キャンパスから伊都キャンパスへと移ったので、箱崎から距離が遠くなり、言語文化・比較文化両研究院にISPの指導を依頼することは難しくなった。これには、キャンパス移転によって両研究院の教員が多忙を極めていること、JTW学生が福岡市の東端からはるばる西端まで出かけるのが物理的に困難であること、という二つの理由がある。学外が21と多いのは、次のような事情による。専任教員が2名と非常に少ないJTWでは、学外の専門家（外国人）を非常勤教員として雇用し、学内では講師を見つけることが難しい科目を教えてもらうだけでなく、ISPの指導も引き受けてもらっている。「学内では講師を見つけることが難しい科目」とは、現代の若者文化、現代文学、伝統芸能などである。

ところで、ISPの選択科目化によって、コーディネーターの業務負担が軽減されたわけではない。まず、学生来日時に、ISP履修についてきめ細かく学生の意思を確認して各部局に依頼した後で、同様のことを3月末～4月初にほぼ同数の学生について行わなければならない。10月または4月に依頼する教員の数も、通年履修が義務だった時代に比べて、大きく減るわけではない。というのも、通年の時には、1人の教員が3人程度の指導を引き受ける場合が多かったからである。信頼できる教員の数は限られているのに、部局の教員1人あたりに依頼する人数をしばらくすると、指導力の低い教員にまで依頼しなければならなくなる。この事情は多くの信頼できる教員の理解を得ており、「自分が面倒を見ましょう」とおっしゃってくださる先生の厚意で、かろうじて40人を超える留学生在が面倒を見てもらっていたわけである。

ISPの選択科目化にはいくつかのメリットがある。まず、信頼できる部局教員の超過負担を軽減し、ISPの持続可能性を高めたと言える。筆者は、毎年ノルマのように複数のJTW学生の指導を部局教員に依頼するべきではないと考えている。理想的には、教員あたり学生1人に限定するか、ある年に複数の依頼をする場合には翌年は休んでいただく程度のペースで、余裕を持った協力をお願いするべきであると考えている。

第2のメリットとして、講義科目登録学生が増え、講義担当教員の意欲を高めている。JTWでは毎年講義課目を増やす努力を続けているが、これによって部局教員の協力を得ても、肝心の履修学生が少なければ、せっかく協力してくれた教員の期待を裏切ることになる。ISP選択科目化で講義科目登録者が増えたことは、意図せざる喜ばしい結果であった。

第3のメリットとして、ISPよりも講義科目をもっと取りたいという学生の満足度が、これまでより高まったと考えられる。特にJTWでの取得単位を母校の成績にトランスファーしたい学生は、ISPの負担軽減を歓迎している。そもそも、学生の選択肢を増やし、自主研究をしたい学生には信頼できる教員を紹介し、講義を取りたい学生には取りやすい環境を整備することは、留学生にとって有利な改革であり、JTWプログラムの質を向上させていると言える。

11. 国際化戦略とJTWの役割

以上、JTWの現状と諸問題を概観したが、以下では、日本の大学の国際化戦略における短期留学

プログラムの役割について、断片的な考察を行う。

近年、日本の大学の国際化は急速に進展し、政府の「留学生10万人計画」はほぼ達成され、今は留学生を30万人にまで増やす計画が進行している。これに合わせて、「グローバル30」も始動した。

しかし、実際のところ、現在の国際化では、もっぱら部局レベルの独自の取り組みこそ目立つけれど、全学を挙げた組織的な取り組みはあまり見られないというのが、我が国の一般的状況ではないだろうか。

これは、大学に限らず我が国の行政組織に広くみられる現象ではあるが、一言で言って、「部局あって大学なし」で、進み方が「タコ壺」的なのである。国が大方針を立て国立・私立の有力大学に指示しても、具体的な対応はそれぞれの部局に案を出させる、という形になっている。結果として、それぞれの部局が独自の国際化プログラムを立ち上げたのであるが、大学全体として組織だった取り組みが行われている印象はあまりない。

「国際教養学部案」が継続的に議論されているようだが、これも1部局に諮問して案を出させるということになっているようだ。しかし、これでは、欧米の学部教育における School of Arts and Sciences のような、包括的な知識の提供は覚束ない。

J T Wは、規模こそ小さいけれど、日本の政治経済・文化社会について、できるだけ包括的な科目を体系的に提供している。というのも、法学、経済学、人文学、人間環境、比較文化など「文系」の各部局から包括的な協力を得ているからこそ可能になっている。

大学の国際化においても、各部局でバラバラに英語科目を開講するというのではなく、全部局が参加し、定員も割いて、独立の組織的対応をする教育組織を立ち上げるのが理想であろう。しかし、それ以前に、もっと簡単にやれることがあると思われる。

J T Wの科目について、とある先生から、日本人学生をもっと参加させるべきだという提案をいただいたことがある。これはもっともであるが、現行の学部制度では、他学部科目を積極的に履修するインセンティブが学生に与えられていないだけでなく、そもそも情報が広く提供されていない。全学的に、英語で講義されている科目の体系化と、履修促進の取り組みがなされてしかるべきだろう。そもそも、今のところ、「英語による講義は留学生のため」という意識が強く、多くの関係者が「自分は関係ない」と思っているところが問題であろう。

J T Wは個人指導の機会として ISP を提供しているが、本来、日本らしい個人指導の形式は「ゼミ」である。法学部、経済学部、文学部など、いわゆる文系の学部だけでも、英語で行うゼミを立ち上げ、その情報を共有することができれば、J T W学生は、ISP の代替選択肢として、ゼミ参加を選ぶこともできる。私は、その方がより深く日本の大学生活を体験することになると思う。

注

- 1 <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/jtw/index.htm>。検索エンジンで「jtw kyushu university」と入力すれば、ほぼ先頭に出てくる。

2011年九州大学サマーコース “Asia in Today’s World”

— 2011年プログラムの概要と今後の課題 —

Report on the 2011 Asia in Today’s World (ATW) Program

岡 崎 智 己*

高 原 芳 枝**

西 原 暁 子**

0. はじめに

Asia in Today’s World (ATW) は、今年で11回目のプログラムを開講・実施し、23名の参加者を受入れた。これにより本プログラムへの受入れ留学生は累計で世界15カ国73大学417人となった。

本稿では、2011年プログラムの概要を報告すると共に、今年度プログラムの問題点とその改善策について考察する。

1. 2011年 ATW プログラムの概要

実施期間	2011年6月22日～8月5日	
対 象 者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で、以下の条件を満たすもの (1) 学業及び人格が優れており、原則として在籍している大学の推薦を受けた者 (2) 留学の目的及び計画が明確で、日本への留学の成果が期待できる者 (3) 日本での留学期間終了後、在籍大学において学業を継続する者 英語を母国語としない者については、TOEFL550点以上の英語能力を有する者	
開講科目	1) 人文・社会科学系「アジア研究コース」全4科目 (教育言語: 英語) ^{注1} 2) 日本語 (初級前半～中級後半・全4レベル6クラス)	
奨 学 金	12万円/人を16人に支給	
見学旅行 (登録制)	1) 佐賀県西有田町 棚田農作業体験 (日帰り) 2) 錦帯橋、厳島神社、広島平和記念公園 (1泊) 3) 日本文化体験 (茶会・座禅) (半日)	参加料 2,600円 参加料 25,000円 参加料 各800円・500円

*九州大学留学生センター教授

**九州大学国際交流推進室准助教

宿 舎	以下の組み合わせにより希望をとり、調整して割り当て ^{注2} 。 1) 5週間ウィークリーマンション+2週間ホームステイ 2) 全期間ウィークリーマンション 3) 5週間民間学生寮+2週間ホームステイ 4) 全期間民間学生寮 5) 全期間ホームステイ
参 加 費	授業料 88,800円（6単位相当）、宿舍料 59,800円～125,000円 見学旅行費（登録制） 見学旅行欄参照

1.1 受講者数

2011年の応募者、並びに受講者（＝受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者）の国別内訳は以下のとおりである。

（単位：人）

応募者総数	受入許可者総数	受講者総数									
45人	45人	23人									
			ア メ リ カ	イ ギ リ ス	タ イ	シン ガ ポ ール	韓 国	中 国	香 港	台 湾	計
			3	5	1	5	3	3	2	1	23

今年度は、2003年に定員50名としてATWを開始して以来、応募者数が最少となった。その要因としては2011年3月に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故が挙げられる。また、受入れ許可者総数に対する受講者数の割合は51%であり、受入れ許可者の約半数が参加を辞退するという結果になった。この51%という数値は過去の実績（2010年：80%、2009年：72%、2008年：89%）と比較しても非常に低い値であり、ここにも東日本大震災と原子力発電所の事故が色濃く影響していることが伺える。

1.2 開講科目

2011年プログラムでは、人文・社会科学系「アジア研究コース」と「日本語コースを」開講した。昨年度までは理系の学生を対象とする「ラボ研究コース」も開講していたが、例年「ラボ研究コース」を選択する学生が少数であるため（2010年：3人、2009年：0人、2008年：6人、2007年：2人）、今年度より開講しないこととした。

① 「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況

各科目とも、授業回数は15回（30時間相当）で、付与される単位は2単位である。今年度、「アジア研究コース」を選択した学生は、以下に挙げる開講科目から2コースを選択受講した。

開講科目・授業担当	受講生数
1. Japan and the Asia-Pacific in Modern Times See Heng TEOW, National University of Singapore	23人

2. Death in Traditional Japanese Literature in the Asian Context	開講中止
Noel J. Pinnington, University of Arizona	
3. Politics and Society in Japan at a Turning Point	8人
Dimitri Vanoverbeke, Catholic University of Leuven	
4. Postwar Survey of Japan's Development: From Fast Growth to Robotic Nation	15人
Dimitri Vanoverbeke, Catholic University of Leuven	

②日本語コースの受講状況

A T W期間中の5週間、ほぼ毎日授業を行い（授業時間総計60時間）に対して2単位を認定した。

初級 1	初級 2	初中級 1	初中級 2	中級 1	中級 2	計
6人	4人	3人	3人	4人	3人	23人

2. ATW プログラムに対する評価と今後の課題

2.1 参加者による開講科目とプログラム全般の評価

- プログラムの総合的な評価（有効回答者数：23人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	19人	4人	0人	0人	0人

- 「アジア研究コース」について（有効回答者数：23人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	14人	8人	1人	0人	0人

- 「日本語コース」について（有効回答者数：22人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	15人	5人	2人	0人	0人

- 「日本語クラス」と「アジア研究」とのバランスについて（有効回答者数：23人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	6人	13人	4人	0人	0人

例年同様、参加者の評価は概ね良好であるが、今年度は、実施期間を5日延長し、時間割も変則的なものを用いて実施したので、これに関する参加者の評価を特に見ておきたい。

昨年度までは6週間の期間中に参加者が6単位相当の科目を履修できるよう、毎日午前9時半から午後2:30まで授業が組まれており、その上、各コースとも予習や課題が課されるので、自由時間が十分に取れず、せっかく日本へ来ても、実際に様々なものに触れ、自ら体験し、多くの人に出会い、

表1：2011年度 ATW 時間割

ATW 2011 Timetable

AS1101: Japan and the Asia-Pacific in Modern Times

AS1103: Politics and Society in Japan at a Turning Point

AS1104: Postwar Survey of Japan's Development: From Fast Growth to Robotic Nation

JLC: Japanese Language Course

20-Jun	21-Jun	22-Jun	23-Jun	24-Jun	25-Jun	26-Jun
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
Arrival	Arrival	10:30-12:00 Opening Ceremony & Orientation	10:30-12:00 class-1 AS1101	10:30-12:00 class-3 AS1101		
		campus tour	13:00-14:30 class-2 AS1101	13:00-14:30 class-4 AS1101		
27-Jun	28-Jun	29-Jun	30-Jun	1-Jul	2-Jul	3-Jul
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SAT
9:00-12:00	10:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	off	ST Nishiarita Farming Work	
JLC Placement Test	class-6 AS1101	JLC class-1	JLC class-2			
13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30			
class-5 AS1101	class-7 AS1101	class-8 AS1101	class-9 AS1101			
4-Jul	5-Jul	6-Jul	7-Jul	8-Jul	9-Jul	10-Jul
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	10:30-12:00		
JLC class-3	JLC class-4	JLC class-5	JLC class-6	class-14 AS1101		
13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30		
class-10 AS1101	class-11 AS1101	class-12 AS1101	class-13 AS1101	class-15 AS1101		
11-Jul	12-Jul	13-Jul	14-Jul	15-Jul	16-Jul	17-Jul
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	ST Hiroshima & Miyajima	
JLC class-7	JLC class-9	JLC class-11	JLC class-13	JLC class-15		
13:00-15:30	13:00-15:30	13:00-15:30	13:00-15:30	13:00-15:30		
JLC class-8	JLC class-10	JLC class-12	JLC class-14	JLC class-16		
18-Jul	19-Jul	20-Jul	21-Jul	22-Jul	23-Jul	24-Jul
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
National Holiday	9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	9:30-12:00	Moving to Homestay	
	JLC class-17	JLC class-18	JLC class-19	JLC class-20		
	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30		
	class-1 AS1103/AS1104	class-2 AS1103/AS1104	class-3 AS1103/AS1104	class-4 AS1103/AS1104		
25-Jul	26-Jul	27-Jul	28-Jul	29-Jul	30-Jul	31-Jul
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
9:30-12:00	9:30-12:00	ST Japanese Culture	9:30-12:00	9:30-12:00		
JLC class-21	JLC class-22		JLC class-23	JLC class-24		
13:00-14:30	13:00-14:30		13:00-14:30	13:00-14:30		
class-5 AS1103/AS1104	class-6 AS1103/AS1104		class-7 AS1103/AS1104	class-8 AS1103/AS1104		
1-Aug	2-Aug	3-Aug	4-Aug	5-Aug	6-Aug	7-Aug
MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
off	10:30-12:00	10:30-12:00	10:30-12:00	10:30-12:00		
	class-9 AS1103/AS1104	class-11 AS1103/AS1104	class-13 AS1103/AS1104	class-15 AS1103/AS1104		
	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30	13:00-14:30		
	class-10 AS1103/AS1104	class-12 AS1103/AS1104	class-14 AS1103/AS1104	Evaluation Closing Ceremony		

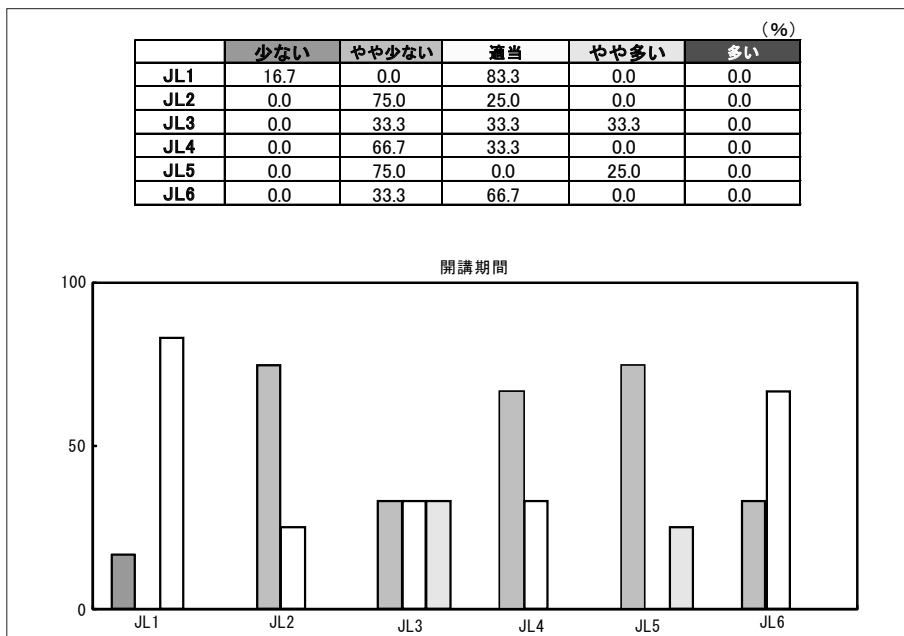
交流したいという希望を満たすことができないという意見があった。

そうした参加者からの希望、意見を受けて、今年度は、試行的にプログラム実施期間を5日間延長し、都合7週間とした。これにより週末の休日が増えた分、学生の自由時間を増やすことができた。その一方、海外から招聘するアジア研究コース講師の滞在期間が3週間を超えることで招聘に問題が生じないよう、アジア研究コースについては、例年通り1コース3週間で開講、実施した。このため、プログラム全体の実施期間は7週に及ぶが、その間、日本語の授業が行われるのは5週間であり、かつ、その5週間のうち1週間は午前2.5時間、午後2.5時間の一日5時間、集中的に日本語を学習するといった変則的な時間割となった。(表1：2011年度 ATW 時間割を参照)

これに対する参加者の評価がどうであったか、日本語の授業実施期間に関するアンケートの回答結果から見てみると、実施期間が「少ない」「やや少ない」という回答が、「適当」を上回っていた。(表2：日本語の授業実施期間に関するアンケート結果) また、参加者のコメント(自由記述)にも、授業実施期間に関するものが比較的多く見受けられた。

- Studying Japanese 5 hours per day was too much. I prefer studying Japanese for half the day, then studying something else. (初級1クラスの学生)
- I think we need more time for JLC class and it should have started at the beginning of the first week in Japan because we didn't have enough time to practice Japanese in daily life for the first few weeks. If it had started at the beginning we would have learned more Japanese and more chances to talk to our host family too. (初級1クラスの学生)

表2：日本語の授業実施期間に関するアンケート結果



- I wish I had Japanese classes in the last week instead of having afternoon lessons in the second week.
(中級1クラスの学生)

来年度は、これらの意見と評価を参考として、より参加者の満足度を高めることができるよう、時間割を再度調整するようにしたい。

2.2 ホームステイと日本人学生によるチューター活動に対する評価

本プログラムでは、2004年の開始当初より参加者の宿泊先の選択肢としてホームステイを用意してきた。一般の日本人家庭に寄宿することを希望する学生は多く、例年参加者の7～8割がホームステイを選択する。また、本学学生の中から希望者を募り、プログラム実施期間中の参加者の生活全般をサポートするべく、原則1対1でチューターを配置している。

以下は今年度の参加学生によるホームステイとチューターに関する評価である。

- ホームステイに関する評価（有効回答者数：16人）

立地	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	4	6	6	0	0

設備	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	10	4	2		

待遇	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	14	1	1	0	0

全般	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	12	3	1	0	0

- チューターに関する評価（有効回答者数：23人）

チューター制度	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	16	5	1	1	0

担当となったチューター	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	17	5	0	0	1

今年度ホームステイを希望した参加者は16名で、うち4名が全期間（7週間）のホームステイを、12名がプログラム終盤に2週間のホームステイをすることを第一希望とした。ホストファミリーとして申込みのあったのは全部で36家庭で、例年に比べて多くはなかったが、先に触れたように震災と原発事故の影響で参加辞退者が多く出て、その結果、ホームステイ希望者も相対的に少なくなったため、若干の余裕をもってホストファミリーとの組み合わせを行うことができた。

留学生のホームステイに対する感想を見ると、例年と同様に立地について多少の不満が生じているものの、ホストファミリーが提供するホスピタリティに対しては満足度が高い。

一方で、2週間のホームステイをした学生の中には、「ホストファミリーとの交流をなおざりにして夜遅くまで帰宅せず、留学生仲間との付き合いを重視していた」と、ホストファミリーから苦情(?)を呈された学生もいた。参加学生に対しては本プログラムへの応募時、およびプログラムへの受入決定後の宿泊先選択の際に、「ホストファミリーとの日常的な交流を通して日本体験を充実させたいと望む者のみがホームステイを選択する」よう通知し、さらにはプログラム開始時のオリエンテーションにおいてもこの点を強調、指導しているが、最終的には学生の自覚に拠らざるを得ず、ホストファミリー側の期待するような「交流」がツブに実現できるとは限らない難しさが依然存在する。

1対1で配置するチューター制度に対する満足度は例年概ね高いが、今年はプログラム参加者が全体的に少なくなったことから、留学生23名+チューター23名の計46名の全員が相互に交流しやすく、留学生とチューターとの関係は例年に比べて更に親密であったようだ。

チューターを統括するリーダーは立候補により決定している。今年はリーダー1名、サブリーダー4名であったが、うち3名にチューター経験がなかった。チューター企画イベントを行った際に、「大勢の人間を手際よく誘導することに不慣れで時間が余計にかかった」ことがあったようで、留学生からの評価の中で指摘があった。しかし、そうした事例はあったものの、リーダーはいずれも責任感が強く、互いに連携をとりながら試行錯誤の中で全体をまとめる努力を行い、多くの留学生の信頼を得ていたように思う。ただ、チューターに採用されながら、ほとんど担当留学生と交流しなかった学生も1名おり、残念だった。今後はチューターとなかなか連絡が取れず、十分に交流ができていないようなケースについては、ATW オフィスへの申し出を促し、プログラム参加留学生と九大生との学生間交流がよりスムーズに進むようにしていきたい。

<注>

- 1 開講を予定した4科目のうち1科目は、招聘講師の健康上の都合によりやむなく開講中止となり、全3科目の開講となった。
- 2 参加者の希望を集計した結果、今年度はウィークリーマンションの利用希望はなかった。

九州大学における春季プログラムの実践

— 2011 AsTW (ASEAN in Today's World) の概要と報告 —

Report on the Asean in Today's World (AsTW) 2011

郭 俊 海*

高 原 芳 枝**

0. はじめに

ASEAN in Today's World (AsTW) は、本学が開発した、ASEAN 諸国の有力大学と共同で現地の大学において実施する、ASEAN + 3 (日中韓) にフォーカスした短期国際教育プログラムである。本稿では、マヒドン大学インターナショナルカレッジ (MUIC) と共同実施した、2010年度プログラムの概要を報告し、その問題点や今後の課題について考察する。

1. 概 要

1.1 コース実施期間 (3月11日～ 3月25日 2週間)

日本の大学 (九州大学も含む) と諸外国の大学の休業期間を考慮し、実施期間を2011年3月11日(金) から3月25日(金) の2週間とした。3月12日(土) ～13日(日) のオリエンテーションを経て、3月14日(月) から授業を開始した。

1.2 対象と募集方法

主として ASEAN 域内の大学、日本、中国、韓国の大学の学生 (学部生と大学院生) を対象としたが、広く世界各国の大学にも募集案内を郵送で配付した。

1.3 参加者

表1は、参加者の国と大学を示したものである。12カ国・地域 17大学から39名の学生が参加した。

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学国際推進室准助教

表1 参加者の国と所属大学

日・中・韓 (13名)			ASEAN 諸国 (26名)															
日	中	韓	インドネシア				カンボジア	シンガポール	タイ		フィリピン		ベトナム			マレーシア	ミャンマー	ラオス
11	1	1	7				1	1	7		3		3			1	2	1
11	1	1	1	1	1	4	1	1	2	5	1	2	1	1	1	1	2	1
九州大学	九州大学中国人留学生	九州大学韓国留学生	ITS Surabaya	Trisakti University	Uin Sunan Gunung Djati Bandung	University of Gadjah Mada	Royal University of Law and Economics	University of Oxford	Khon Kaen University	Mahidol University	University of Philippine	Ateneo de Manila University	Hanoi University	Foreign Trade University	Vietnam National University Hanoi	National Taiwan University	Diplomatic School of Yangon	National University of Laos

1.4 宿舎、参加料金と奨学金

宿舎は、MUIC 附属のホテルを、1室2名で利用した。参加料金は、九州大学の授業料59,200円と宿舎料とフィールドスタディに要する実費の68,800円とした。

九州大学と MUIC 共に参加学生に対する奨学金を提供し、九州大学は、14万円を12名の ASEAN+3 諸国（日本を除く）の学生に、6万円を九州大学の学生3名に支給した。一方、MUIC は参加料金と渡航費相当分の奨学金を8名の参加学生に支給した。これにより、参加者39名のうち、23名が奨学金を受給することができた。

2. カリキュラムとコース概要

このプログラムは、① ASEAN 研究（ASC: ASEAN Studies Courses）、②アジア言語・文化（ALC: Asian Languages & Cultures Courses）、③フィールドスタディから構成され、以下の7コースを設置した。① ASC と② ALC の各科目は2単位とし、参加者は4単位（ASC 1科目 + ALC 1科目 = 2科目）を履修して、プログラムを修了する。

① ASEAN 研究コース／ASEAN Studies Courses (ASC)

- ◇ ASEAN & 東アジア事情／Current Affairs of ASEAN and East Asia
- ◇ 農業経済&食品安全／Agricultural Economics and Food Safety

- ◇ 異文化コミュニケーション / Cross-Cultural Communication
- ② アジア言語・文化コース / Asian Languages & Cultures Courses (ALC)
 - ◇ 初級日本語・文化 / Basic Japanese and Culture
 - ◇ 初級タイ語・文化 / Basic Thai and Culture
 - ◇ 初級インドネシア語・文化 / Basic Indonesian and Culture
 - ◇ 初級中国語・文化 / Basic Chinese and Culture
- ③ フィールドスタディ
 - ◇ サメット島でのオリエンテーション
 - ◇ Joe Louis Puppet Theatre (タイ伝統人形劇) 見学
 - ◇ Ayuttaya & Amphawa ホームステイ
 - ◇ Amphawa Night Floating Market (アユタヤ水上市場見学)
 - ◇ タイ料理教室
 - ◇ その他
- ④ ゲストレクチャー

アセアン事務総長特別補佐官、タームサック・チャラーンパラヌパップ (TERMSAK CHALERMPALANUPAP) 博士による特別講義「5Cs of ASEAN」

表2 時間割

ALC 9 : 30 – 11 : 50	Basic Japanese & Culture	Basic Thai & Culture	Basic Indonesian & Culture	Basic Chinese & Culture
Lunch Break				
ASC 13 : 30 – 15 : 50	Current Affairs of ASEAN & East Asia	Agricultural Economics and Food Safety	Cross-Cultural Communication	
Field Study, Cross-cultural Activities, etc.				

ALC: Asian Languages & Cultures ASC: ASEAN Studies Courses

表3 アジア研究コース科目担当教員・受講者数

科目名・講師 () 内は担当コマ数 (1 コマ=140分)	受講者数
アセアン事務局特別講義 / Plenary Lecture by ASEAN Secretariat 「5Cs of ASEAN」 TERMSAK CHALERMPALANUPAP (アセアン事務総長特別補佐官)	39
ASEAN & 東アジア事情 / Current Affairs of ASEAN and East Asia ◇ Professor Machiko Hachiya, Faculty of Law, Kyushu University (4) ◇ Dr. Dale Rorex, Social Science Division, Mahidol University International College (5)	18
異文化コミュニケーション / Cross-Cultural Communication ◇ Prof. Jordan Pollack, International Student Center, Kyushu University (4) Prof. Ruchi Agarwal, Faculty of Social Sciences, Mahidol University (5)	13
農業経済 & 食品安全 / Agricultural Economics and Food Safety ◇ Professor Chariya, R. Brockelman, International College of Mahidol University (4) ◇ Associate Prof. Shoji Shinkai, Fukuoka Women's University (5)	8

アジア研究コース科目担当教員・受講者数

科目名・講 師	受講者数
初級日本語・文化／ Basic Japanese & Culture ◇Ms. Kyoko Takada, International Student Center, Kyushu University	12
初級タイ語・文化／ Basic Thai & Culture ◇Ms. Anchalee Pongpun, Humanities and Language Division, Mahidol University International College ◇Ms. Arpaporn Iemubol, Humanities and Language Division, Mahidol University International College	16
初級インドネシア語／ Basic Bahasa Indonesia & Culture ◇Ms. Kurniati Wirakotan, Humanities and Language Division, Mahidol University International College	2
初級中国語／ Basic Chinese & Culture ◇Mr. Zhang Bo, Humanities and Language Division, Mahidol University International College ◇Ms. Wei Xiaoxia, Humanities and Language Division, Mahidol University International College	9

4. 参加者の評価

プログラム最終日に、参加者によるプログラム評価のアンケートを行った。プログラム全体、コース内容、フィールドスタディについて、五段階の基準（5 = Excellent; 4 = Good; 3 = Fair; 2 = Poor; 1 = Very Poor）で評価させ、各質問項目について、必ずコメントを書かせるようにした。下の表は五段階評価ポイントを集計したものである。

表4 参加者による評価

AsTW as a whole		Program Structure (1 ALC +1 ASC+Field Studies)	
Rating	(Answers)	Rating	(Answers)
5	(32)	5	(25)
4	(3)	4	(12)
3	(1)	3	—
2	(0)	2	—
1	(0)	1	—
Study Trips: Frequency		Study Trips: Variety	Orientation Contents:
Rating	(Answers)	Rating	(Answers)
5	(21)	5	(25)
4	(13)	4	(8)
3	(2)	3	(2)
2	—	2	—
1	—	1	—

表4が示すように、「Good」や「Excellent」と評価した学生が多かったことから、アジア言語・文化コース、アジア研究コース及び本プログラム全体に対して、ほとんどの学生が非常に満足していることが伺える。また、フィールドスタディ（頻度と内容）、オリエンテーションにおいても、高い評価が得られている。学生たちのコメントをまとめると、次のとおりである。

◎ ASEAN、日本理解及び異文化理解の促進

このプログラムに参加したことを通じて、ASEAN の政治的経済的情勢、歴史、言語や文化、宗教及び食の安全など、アセアン全般にわたって理解することができた。授業では、学生たちは ASEAN について自らの考えを述べる、また自国のことを紹介し他の学生の意見を聴くなどして、ASEAN や自国のことについて再認識ができた多くの学生が述べている。また、ASEAN 学コースを通して新たな発見をし、ASEAN に関する理解が深まったという感想もある。以下は抜粋した学生のコメントである*。

- I really thought that I was lucky to participate in this program. I will never forget it. It is one of the amazing time in my life.
- This program gives me many experiences and knowledge about ASEAN and other culture.
- I think AsTW is a great program that really teaches us inside and outside of the classroom. I think it should be made known more to ASEAN member countries because it's really useful for propagating awareness about ASEAN affairs intend of us as well.
- I don't have any word to express How Great AsTW program, give Soft and Hard ability!
- I feel so happy I enjoyed talking with other country students during this program.
- The AsTW is wonderful and I hope more people would take notice of it and want to join. I hope it will boost the state of ASEAN through this type of participation by the youths.
- If I have a chance in future, I will take part in this program for sure.

◎日本人学生の自己主張能力とコミュニケーション能力の意識向上

多くの日本人学生が、ASEAN の学生とのグループディスカッションなどを通じて、自分たちが積極的に意見を述べるためにも、もっと英語によるコミュニケーション能力を高めなければならない、また国を背負っていく世代としてもっと努力しなければならない、という考えを持つようになるなど、意識の向上が認められる（以下は抜粋した日本人学生のコメントの一部である）。

- ほぼ失っていた向上心をまた少しでも取り戻すことができました。
- 外国のことで知らないことを知ることが出来た外に、日本のことも学ぶことができた。また、他の国の生徒のプレゼン能力の高さに感動しました。私には根本的な見直しが必要だと痛感しました。
- 日本の歴史、今後の ASEAN 諸国との関係の展望について日本の外からの視点で知ることができ新鮮に感じました。
- 途上国がよい発展を遂げるためには何が必要で、そのために、日本人としてどうあるべきか、ということを考えるいい機会になったと思います。
- 自分の英語力を見つめ直す機会を得ました。
- 外のアジアの学生と交流することで、日本を客観的に見つめる機会になった。またアジア

*学生のコメントは原文のまま。

の知識を深めることができた。

- 何よりも一番よかったと思う点は、ASEAN 諸国に友達ができたこと。……今後の自分のキャリアを考える上においても、非常にいい影響を受けたと思う。

午前 8 時 50 分から午後 4 時まで、授業がびっしりと詰まっている上に、過去には、週 2 回程度は授業終了後、夕方や週末のフィールドスタディも用意されていたため、こういった過密なスケジュールとインターネットのアクセス不具合に関する不満の声があった。しかし、今年度は、授業終了後のフィールドスタディの回数を減らし、また共同開催校の協力のもとで、インターネットの接続状況が多いに改善した。最も大きかった二つの不満を解消したことで、今年度参加学生からは、今後も引き続きこのプログラムを継続していくべきという激励の声が多々あった。

学生のコメントをまとめると、概ね次のとおりである。

- This program can become bridge to build mutual understanding each other. Hope it can be held again in the next and next year!
- AsTW is very nice program. If I can, I want to join again!
- 個人的に期待していた以上に有意義なプログラムだったので、より多くの九大生および他大学の人がこのプログラムのことを知れるように、もっと広報したらいいと思いました。
- 期間を延ばす、またプログラム参加者のみではなく現地の大学生とも触れ合える機会をもっと作るとよいと思った。

5. 今後の課題

日本の大学（九州大学も含む）と諸外国の大学の休業期間を考慮し、本年度は 3 月 11 から 3 月 25 日までの 2 週間とした。それにもかかわらず、一部の地域の大学（たとえば、香港、マレーシアなど）の授業期間と重なり、これらの地域の大学からの参加者はいなかった。また、プログラムの開講期間に関しては、「短すぎる」との意見も参加した学生から寄せられている。期間を長くすれば滞在費や授業料及び講師の謝金などの経済的な問題や、共同開催校の新学期と重なり教室や宿泊などの施設の利用が困難になるなどの問題が出てくる。

「もっと現地の大学生と触れ合える機会を作るべき」との声もあったが、現地大学は学期中であるため、現地大学の学生を AsTW の授業に参加させるのは難しい、また、AsTW 生が現地大学の授業に向くとしても、移動の時間を要するため AsTW の授業に支障が出るなどの問題がある。しかしながら、できるだけ学生の声を反映させつつ、共同開催校の事情を考慮しながら開催時期、コースの長さ及びカリキュラムの改善を検討していきたい。また、日本の他の大学の学生が多く参加するようにアピールしていきたい。

アセアンの一部の国は、奨学金がないと経済的に参加しにくい実情がある。いかに財源を確保し多くの優秀な学生を獲得できるかも課題の一つである。

2010年度 九州大学留学生センター・留学生指導部門報告

スカリー 悦 子*

白 土 悟**

高 松 里**

I. 留学生指導部門の概要

留学生指導部門の現在の活動領域は大別して5つある。

- ①学部・大学院教育および留学生センターにおける教育 ②アドバイジング&カウンセリング
- ③国際交流会館における活動 ④社会連携活動
- ⑤研究・研修活動

である。以下、順に報告することにした。

II. 教 育

1. 授 業

学部・大学院・留学生センターにおける講義科目は表1の通りである。

表1 2010年度留学生指導部門の講義

学期	課 程	担 当 科 目	担当者
前期	学部（全学教育）	文系コア科目「教育学－異文化理解のコミュニケーション」	スカリー
		総合科目「日本事情」	高松
		総合科目「大学とは何か」（リレー講義）	白土
	大学院	人間環境学府「留学生教育政策論」	白土
後期	学部（全学教育）	文系コア科目「心理学」	高松
		少人数セミナー「留学生交流論」	白土
		総合科目「日本事情－福岡の地域社会と文化」	白土
	大学院	共通教育科目：国際性領域「Intercultural Communication」	スカリー
		人間環境学府「留学生アドバイジング論」集中講義	白土
		人間環境学府「異文化適応論」集中講義	高松
	留学生センター	日韓共同理工学部留学生予備教育「日本事情」	スカリー・ 白土・高松
		日本語研修コース「日本人との会話」	高松

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター准教授

2. 留学生センター関係委員会

- 留学生センター委員会（スカリー）
- 国際交流専門委員会（スカリー）
- 国際交流会館サポーター会議（スカリー）
- 高等教育開発推進センター委員会（スカリー）
- 学生委員会（白土）
- 学生生活相談連絡協議会（高松）
- G30生活支援部会（白土）
- 伊都地区外国人居住環境整備推進会議（白土）
- 伊都キャンパス学生相談ミーティング（白土、高松）
- サークル顧問教員等懇談会（高松）
- 新中央（文系）図書館検討ワーキンググループ（高松）

3. 学内協力講座関係

関係部局の研究指導・入試・委員会等の業務に関わっている。

- 人間環境学府における研究指導（白土）
- 人間環境学府博士論文調査委員会（白土）
- 人間環境学府修士論文口述試験（白土）
- 人間環境学府修士課程（社会人特別選抜）前期・後期入試（白土）
- 人間環境学府修士課程（一般）前期・後期入試（白土）
- 21世紀プログラム入試関連業務（高松）
- 21世紀プログラム拡大実施委員会（高松）

II. アドバイジング&カウンセリング活動

1. 問題解決型と予防・教育型という2つの活動領域

アドバイジング&カウンセリング活動には、問題解決型と予防的・教育型の、内容も方法も異なる2つの活動領域がある。

問題解決型活動としては、留学生やその家族の相談に応じ、問題解決を図っていくという個別相談を行っている。個別相談には、情報提供から修学・生活・心理問題に助言や援助を与えるアドバイジングや心理カウンセリングまで幅広い活動が含まれる。

また予防的・教育型活動としては、留学生やその家族の適応上の問題を予防したり、異文化間で起こる摩擦・偏見等について認識を高めたりする諸活動がある。すなわち、①新入生やチューターのオリエンテーション、②学生団体（九州大学留学生会、九州大学国際親善会、九州大学ムスレム学生会）の相互扶助・交流活動に対する助言がある。殊に、これらの団体が行う日本人学生や地域団体との交流行事は留学生に対しては日本社会や文化への理解を促すという効果があると同時に、日本人側の留

学生理解を深めるという効果もある。このような意味において、異文化間相互理解教育である。留学生指導部門の教員はそのコーディネーターという役割を担っていると言える。③教職員の留学生受け入れを支援する活動、④地域ボランティア団体への協力など、4種類に分けることができる。

2. 問題解決型相談の実施状況

留学生指導部門は学内の2つのキャンパスと2つの国際交流会館で相談日を設定して個別相談を行っている。すなわち、①箱崎キャンパスの留学生センター分室、②伊都キャンパスの留学生センター相談室、③香椎浜の国際交流会館、④伊尻の国際交流会館、である。

相談担当者は、スカリー、白土、高松の3人であり、それぞれの相談担当日と場所は、受け持ち授業と重ならないように設定している。相談時間は前期・後期の学年暦に沿って、月曜日から金曜日の13時から17時である。

また4月の春季休業（4月1日～10日）中は、新入留学生が来日するので、受け入れ活動を行い、また夏季休業（8月7日～9月30日）中の9月下旬も同様に新入留学生の受け入れ活動の時期である。また、冬季休業中（12月24日～1月7日）には一時帰国する留学生もいるが、各地のホームステイに参加したり、国際交流会館で過ごしたりする留学生も少なくない。これら期間中も事件・事故などの対応のため常時、連絡がつくようにしている。

3. 相談件数

留学生指導部門で受けた相談件数は表2の通り、延べ905件であった。ここにいう相談件数には簡単な情報提供は含まれていない。問い合わせに対する情報提供は重要であると思われるが、あえてカウントしていない。留学生に関する専門的援助が必要とされたものを記載している。

さて、2010年度の相談活動は次のような状況であった。

①<九州大学留学生からの相談>は合計372件（全体の40%）であった。4月から7月までの前学期が特に多い。問題別で言えば、修学問題は計135件（36%）である。その内訳は「入学・進学関係」57件、「教育制度・内容」34件、「進路相談」39件、「研究室の人間関係」は5件である。これら個別案件については守秘義務上ここに詳述しないが、大学院への進学相談や就職か進学かで悩むケースなどがあった。留学生本人が何らかの決断と行動が取れるよう何度もカウンセリングを行ったものも少なくない。

生活問題は計188件（50%）であった。特に多いのは「宿舍問題（国際交流会館含む）」115件であり、サポーター指導・会館退去時の宿舍探しの相談が多い。次いで「法律的問題」16件、「宗教的問題」13件、「生活問題」15件、「病気・事故」9件、「人間関係」8件の順である。なお、「宗教的問題」とは、主にイスラム教の礼拝場所についての相談助言である。また例年数十件を数えていた「メンタルヘルス」は5件と非常に少なかった。これにはどのような原因があるのか。実際に問題の発生が抑えられているのだろうか。今後もその動向を注視していきたい。

各留学生会からの相談は30件であった。九州大学留学生会、九州大学ムスレム学生会の役員との地域との交流行事・会自体の運営等に関する相談であるが、相談担当教員がキャンパス移動や授業

表2 2010年度留学生指導部門の個別相談件数

事項		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
九大留学生からの相談														
修 学	入学・進学関係	7	4	2	7	5	6	5	6	6	6	2	1	57
	教育制度・内容	0	1	2	5	5	3	4	3	3	0	7	1	34
	進路相談	0	4	0	4	8	1	1	4	1	10	2	4	39
	研究室の人間関係	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	0	5
生 活	法律的問題	0	4	3	0	0	0	1	0	2	3	0	3	16
	経済的問題	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
	宗教的問題	0	1	0	2	1	0	0	3	0	2	4	0	13
	宿舎問題（国際交流会館）	10	5	2	9	3	5	2	2	8	13	17	16	92
	宿舎問題（その他）	5	0	7	0	0	0	2	3	0	0	4	2	23
	生活問題	3	1	0	0	3	3	0	0	0	2	0	3	15
	事故病気等	1	0	5	0	0	2	0	0	0	0	0	1	9
	渡日・滞日許可	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	人間関係	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	5	8
	子弟の教育問題	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	帰国準備	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	メンタルヘルス	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	国保・一般保険	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	各留学生会	12	0	3	2	0	0	3	0	3	1	0	6	30
その他	その他分類不可	2	5	5	3	0	0	0	0	0	2	2	0	19
小 計		41	26	31	36	25	20	22	21	24	39	41	46	372
九大生以外の外国人からの相談														
	入進学	3	4	5	4	0	0	2	4	2	3	0	2	29
	その他	0	1	2	7	0	0	2	3	0	0	0	2	17
小 計		3	5	7	11	0	0	4	7	2	3	0	4	46
日本人からの相談														
学 生	留学生とのトラブル	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	0	0	5
	海外留学相談	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	7
	国際親善会関係	2	2	0	0	0	0	11	5	0	1	3	5	29
	その他	7	12	11	33	10	23	0	13	10	13	19	11	162
教職員	入進学	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	奨学金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	日本語関係	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	コンサルテーション	7	15	10	1	0	2	8	0	1	0	3	10	57
	その他	21	4	7	8	1	3	4	4	4	9	13	8	86
外 部	情報・コメント	3	8	3	3	5	4	5	4	4	2	4	4	49
	留学生との交流	3	5	3	5	1	1	9	6	1	3	4	8	49
	入進学	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
	苦情	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	4	9	2	3	1	1	6	0	3	0	0	5	34
小 計		48	55	40	53	22	34	45	33	23	31	48	55	487
総 計		92	86	78	100	47	54	71	61	49	73	89	105	905

1) 以上は、主要相談件数（面接に長時間を要するもの）は延べ数である。（1人が何度も来室している場合もある）

2) 厳密な分類は実際上困難であるため、大きなカテゴリーを設定した。

3) 短時間で終わる簡単な問い合わせは含まれていない。

4) 「その他の外国人」とは、卒業生、訪問研究員、他学校の学生などである。

などで研究室に不在の時間が増えており、留学生会としては連絡が付けにくい模様である。

- ②<九大生以外の外国人からの相談>は合計46件（全体の5%）であった。そのうち「入進学」は29件であった。主に日本語学校在籍中の学生が大学院受験・研究生志望についてアドバイスを求めて来る。アドバイスによって、本学に入学した学生も少なくない。日本語学校では大学院受験指導が不十分なところが少なくないようである。
- ③<日本人からの相談>は合計487件（全体の54%）と例年以上に多い。なかでも、日本人学生からの相談は203件であり、最も多い。海外留学相談やチューターからの相談もあった。次いで、教職員からの相談が150件あった。そのなかで「コンサルテーション」が57件と増えている。教員・職員が留学生問題に対する対処方法についてアドバイスを求めてくる状況が徐々に増えている。また外部からの相談が134件もある。地域団体（国際化協会、警察等を含む）への情報提供や新聞社の取材対応、留学生との交流行事の希望などである。外部からの苦情は、近年ほとんど見られない。

4. 予防・教育型の支援活動

留学生指導部門は学内行事および学生団体・地域ボランティアへの支援活動に年間を通じて関わっている。表3の通りである。特に、4月・10月には新入留学生に対する初期適応支援（各約200名を対象）を行っている。また、『チューターの手引』（留学生課編）や高松里著『留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門』（2008年度版、3500部）発行。後者は入学式後のオリエンテーションで新入生全員に配布している。

また、次のような学生団体・支援団体に対する助言を行っている。

(1) 九州大学留学生会（KUFSA）

留学生の相互扶助組織、主に、学生間の交流活動および地域団体との交流のコーディネーションを行っている。（表4）

(2) 九州大学ムスリム学生会（KUMSA）

ムスリム学生による相互扶助およびムスリム理解のための講演会などを行っている。伊都キャンパスのレストランのメニューについて、ムスリム教徒が食べることができるメニューが少ない、魚のメニューなどを増やせないかという要望が上がっている。

(3) 九州大学国際親善会（KUIFA）

留学生の受験生案内、香椎浜会館の入居支援、毎週木曜日のコーヒーアワー（於：留学生センター分室）、シンガポール大学との交換プログラム「Inter Link FUKUOKA」などの活動を行っている。（表5）

(4) ボランティアグループ SOLA（そら）

社会人による留学生支援グループである。留学生の引越しなど個別援助や九大留学生会等の交流行事の手伝いなどを行っている。

(5) 福岡フレンドリークラブ

九州大学には家族同伴の留学生が約300人いる。300人近くの夫人たちやその子供たちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、九州

表3 2010年度留学生指導部門の留学生支援活動

日 時	活 動 内 容	担 当
2010年		
3月23日(火)	チューター説明会	留学生課、高松
3月25日(木)	国際交流会館受け入れボランティア対象のオリエンテーション	留学生課、高松
4月5日～7日 (月～水)	新入留学生への適応支援活動(会館入居、買物等)	留学生サポートセンター、 スカリー、高松、九親会
4月8日(木)	新入生受け入れに関する履修登録説明会(伊都)	高松
4月8日(木)	全学新入生オリエンテーション(於:国際ホール)	留学生課、白土
4月10日(土)	国際交流会館(香椎浜会館・井尻会館)の防災訓練、オリエンテーション、歓迎会	スカリー
4月10日(土)	福岡帰国留学生交流会・総会	白土
4月16日(金)	学部新入留学生に対するチューターマッチング	留学生課、高松、九親会
4月21日(水)	福岡フレンドリークラブの学内交流会打ち合わせ	白土
4月21日(水)	学部新入生&チューターのオリエンテーション(伊都)	留学生課、高松
4月23日(金)	九大留学生会スポンサーミーティング打ち合わせ(案内発送、決算・予算書、議事次第等々について)	白土
4月24日(土)	イスラムフード・フェスティバル	九大ムスリム会、高松
5月9日(日)	九大留学生会スポンサーミーティング(20の地域団体との年間行事日程調整、於:国際ホール)	九大留学生会、白土
6月9日(水)	福岡フレンドリークラブ前期会合	白土
6月26日(土)	福岡国際育英会理事会	白土
9月17日(金)	G30サポーター・オリエンテーション(伊都)	スカリー、高松
9月22日(水)	チューター説明会	留学生課、高松
9月26日(日)	支援ボランティア日本人学生に対する説明会	香椎浜会館、九大国際親善会
9月28日 ～10月5日 (火～火)	新入留学生の受け入れ(約550人)ー香椎浜会館にて新入居者に対する支援	留学生課、九親会
9月29日(水)	福岡フレンドリークラブの後期日程の打ち合わせ会議	白土
10月7日(木)	全学新入生オリエンテーション	留学生課、白土
10月13日(水)	福岡フレンドリークラブ後期会合	白土
11月20日(土)	伊都キャンパス・学園祭警備	白土
2011年		
1月28日(金)	全学学生生活相談連絡協議会	白土、高松
1月31日(月)	国際交流会館サポーター・オリエンテーション	スカリー
3月17日(木)	チューター(サポート・チーム)説明会	留学生課、高松
3月18日(金)	福岡フレンドリークラブ役員との会合(来年度打ち合わせ等)	白土
3月27日(日)	国際交流会館オリエンテーション調整会議	スカリー
3月28日(月)	伊都ドミトリー受け入れ会議	留学生課、高松、九親会
3月29日(火)	国際交流会館において受け入れ開始	スカリー
4月1日～5日 (金～火)	香椎浜会館での適応支援(国費留学生の大半が来日。夜中に到着の留学生もいるため、毛布などを確保)	九親会、会館サポーター
4月3日(土)	天神ツアー(会館から天神までバスで行き、国際交流関係施設の訪問等)	そら
4月6日(水)	学部1年生対象、履修説明会	高松
4月7日(木)	全学新入留学生オリエンテーション(於:国際ホール)	留学生課、白土

表4 九州大学留学生会の主要な年間行事

日 時	交流活動行事	備 考
2010年 5 月	スポンサーミーティング	約20の地域団体との年間交流行事の日程打ち合わせ会議
6 月	サッカートーナメント	留学生チームを編成している。
	九大会との懇談会	九大会は、九州大学 OB の集まり。
7 月	九州バス旅行（日帰り）	（財）西日本国際財団の助成による
10月	文化交流会（於：香椎浜会館）	
10月	国際親善料理交歓会	留学生約120人、日本人約50人参加
12月	国際親善 X マスパーティー	留学生約100人、日本人約50人参加
2011年 1 月	ボーリング・トーナメント	
2 月	カラオケ・コンテスト	各国留学生による日本歌謡披露
3 月	太宰府天満宮観桜会	留学生約80人、日本人約100人参加

表5 留学生センターにおける交流・支援行事

曜 日	時 間	場 所	活 動	主 催 者
毎週火曜日	17:30～19:00	伊都・ビックサンド	全学コーヒーアワー	九州大学国際親善会
毎週水曜日	12:45～14:00	箱崎・留学生センター 分室	留学生家族の日本語教室	福岡フレンドリークラブ
	14:30～16:00		Women's friendship の集い	福岡フレンドリークラブ
毎週木曜日	17:30～19:00		International Coffee Hour	九州大学国際親善会
毎週金曜日	17:00～18:30	伊都・ウエスト4号館	糸島コーヒーアワー	九州大学国際親善会

大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（12:30～14:20）および交流会（14:30～16:30）である。これら活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。福岡地域留学生推進協議会よりその15年間の活動が表彰された。（表5）

Ⅲ. 国際交流会館における活動

国際交流会館のハード面の管理業務は外部発注されている。そのほかに、ソフト面の指導・問題対処などが必要であるが、この領域に留学生指導部門（スカリー）がかかわっている。以下の通りである。

- ①香椎浜会館、毎週木曜日相談業務を行う。
- ②会館職員とサポーターの仲介、アドバイザーとして情報連絡を適宜行う。
- ③香椎浜、井尻会館の新入留学生に対してオリエンテーションを毎年4月と10月に行う。その後、歓迎パーティを行うが、それは1週間前から準備し、パーティ実行、後片づけをサポーター、会館職員とともに行う。
- ④毎年4月と10月初め、サポーターと九州大学国際親善会とともに会館受け入れ準備と受け入れを

行う。

- ⑤会館入居者の問題解決のため面接をする。
- ⑥留学生会とボランティア市民団体との活動指導を必要時する。
- ⑦留学生サポーターからの会館問題、人間関係、進路問題など問題を解決する。

IV. 社会連携活動

1. 講演・会議等

【2010年】

- ・ 4月2日(金)：講演「異文化ストレスとその対処法」(福岡大学国際センター主催、高松)
- ・ 4月14日(水)：九州留学生問題フォーラム代表世話人会(白土)
- ・ 4月26日(月)：福岡県国際ビジネス人材支援会議(白土)
- ・ 5月22日(土)：山口女性サポートネットワークにて講演「被害者支援におけるセルフヘルプ・グループとサポート・グループ」(宇部市、高松)
- ・ 10月27日(水)：(独)日本学生支援機構主催「全国留学生担当者研修会」にて講演「留学生担当者の心がまえー留学生アドバイジングの視点から」(東京オリンピックセンター、白土)
- ・ 12月18日(土)：久留米ゼミナール日本語教師養成講座で講演(高松、久留米市)

【2011年】

- ・ 2月17日(木)：帝塚山大学心理福祉学部シンポジウム「こころのケアとサポートの教育」にて基調講演および指定討論者(高松、奈良市)
- ・ 2月25日(金)：長崎大学留学生センター第4回FD研究例会にて講演「留学生の心理的諸問題について」(高松、長崎市)

2. 委員会等

- ・ 九州留学生問題フォーラム理事・事務局長(白土)
- ・ 九州留学生問題フォーラム理事(高松)
- ・ (財)福岡国際育英会理事(白土)
- ・ 福岡県国際ビジネス支援会議・幹事(白土)
- ・ 国土交通省海ノ中道海浜公園ユニバーサルデザイン検討委員会委員(白土)
- ・ (独)日本学生支援機構・月刊「留学交流」編集協力者会議委員(白土)

V. 研究と研修(2010年度)

1. 著書・論文等

- ・ 白土悟「中国と日本の留学交流の将来に関する考察」、望田研吾編『21世紀の教育改革と教育交流』東信堂、2010年、251-266頁

- ・白土悟「中国の市場経済期における公費派遣政策の考察」、『九州大学留学生センター紀要』第19号、2011年3月、1-44頁
- ・高松里「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門（2011年度版）」4000部
- ・高松里「平成21年度福岡都市圏における外国人留学生生活実態調査報告書」福岡国際交流センター、2010年（分析担当）
- ・高松里「人は語るべきことを語っているのだろうか?」、『人間性心理学研究』27（1・2）、2010年、97-102頁
- ・高松里「スロー・コンセプトによるエンカウンター・グループ」、伊藤義美・高松里・村久保雅孝編著『パーソンセンタード・アプローチの挑戦』創元社、2011年、269-278頁
- ・高松里「月曜会」、『エンカウンター通信400号記念特集号』福岡人間関係研究会発行、2011年、58-61頁
- ・高松里「『当事者研究』という方法」、『エンカウンター通信400号記念特集号』福岡人間関係研究会発行、2011年、98-102頁
- ・高松里「被害者支援におけるセルフヘルプ・グループとサポート・グループの意味」、特定非営利活動法人・山口女性サポートネットワーク事業報告書『DV被害母子のためのヒーリングケア』、2011年、6-20頁
- ・高松里「書評：窪田由紀『臨床実践としてのコミュニティ・アプローチ』」、『心理臨床学研究』28-1』2011年、103-104頁

2. 学会発表等

- ・井内かおる・高松里「親との死別・離別体験者についての当事者研究～その体験がどう影響しているか～」、日本人間性心理学会第29回大会、2011年。
- ・村久保雅孝・平井達也・井内かおる・高松里・都能美智代・吉川麻衣子「スロー・エンカウンター・グループの依拠要素とジレンマ」、日本人間性心理学会第29回大会、2011年。
- ・高松里「『色覚マイノリティ』についての当事者研究」、日本人間性心理学会第29回大会、2011年。
- ・高松里（企画/話題提供）・井内かおる（話題提供）・押江隆（話題提供）・永野浩二（指定討論）・村久保雅孝（指定討論）「自主企画：当事者研究の必要性」、日本人間性心理学会第29回大会、2011年

3. 研究助成等

- ・科学研究費補助金・基盤研究C「中国の地方都市における留学人材政策の研究」（白土）

4. 研究・研修活動

- ・4月3日(土) 28日(水):「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」準備会（高松）
- ・4月16日(金):多文化間カウンセリング研究会（高松）
- ・5月7日(金)～10日(月):「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」開催（沖縄、高松）

- 5月15日(土) 16日(日)：「九重エンカウンター・グループ・スタッフ研修」(二丈町、高松)
- 5月21日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (高松)
- 6月11～13日：異文化間教育学会 (奈良教育大学、白土・高松)
- 7月17日(土)～19日(月)：エンカウンター・グループ・セミナー (福大、高松)
- 7月24日(土)：スロー・エンカウンター・グループ研究会 (福岡、高松)
- 9月16日(木)～24日(金)：中国科研調査 (白土)
- 9月17日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (高松)
- 9月24日(金)～26日(日)：日本人間性心理学会 (熊本大学、高松)
- 12月11日(土)：九州教育学会 (九州大学、白土)
- 12月12日(日)：福岡県臨床心理士会研修会 (高松)
- 12月17日(金)：沖縄EGスタッフミーティング (高松)
- 12月23日(木)～27日(月)：九重エンカウンター・グループ (九大山の家、高松)
- 12月25日(土)～30日(木)：中国科研調査 (白土)
- 1月22日(土) 23日(日)：ワークショップ「ミドルエイジを生きる」(高松)
- 1月28日(金)：多文化間カウンセリング研究会 (高松)
- 3月31日(木)：異文化間教育学会理事会 (駒沢大学、白土)

5. 学会役員等

- 異文化間教育学会理事 (白土)
- 日本比較教育学会理事 (白土)

VI. 結 語

九州大学に入学する留学生数は年々増加している。学部・大学院課程だけではなく、夏期プログラム、短期交換学生プログラム、留学予備教育課程など、様々なプログラムに留学生は在籍している。すなわち、留学目的、留学期間が多様化している。留学生指導部門は、国際部 (留学生課、留学生サポートセンター、国際交流会館など)、各学部の留学生担当教員・学生相談担当教員、更に健康科学センター、学生生活修学相談室との横の連携をますます重視していかなければならない。常日頃の連絡を保つことによって、「教育交流体制」は漸く安定的に維持されるものと思われる。留学生の質・量が一定せず、毎年変動し続けるという「宿命」的状况の中で、既存の部門との「連携」が一層重要になっているのである。